
コシ = ファン = トウツテ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コシィファンニトウツテ

【Nコード】

N3429L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

彼女が浮気をするかどうか賭けることに。さてさてその結末は。モーツアルトの話題作を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

コシ＝ファン＝トゥッテ

第一幕 変装をして

「いや、凄いだろ」

「いや、僕の方こそ」

十八世紀のナポリのあるカフェに白いみらびやかな軍服を着た二人の若い軍人達が笑顔で言い合っていた。一人はすらりとしていて明るい顔立ちをしている。髪は黒くかなり癖の強く細いものである。目は黒くはつきりとした光をたたえている。全体的に整っている顔だ。

もう一人は茶色の髪の高い男で顔はやや細長い。そして目の光は青だ。黒髪の青年に比べるといささか知的な印象を受ける。そして二人の間に黒い学者を思わせる服を来た白髪の老人がいる。彼はやけに知的な、それでいて意地の悪そうな黒い光を放つ目をしている。その顔は面長で端整であり学者然としているがそれでも何処か意地悪そうなものを漂わせている。彼はそのまま二人の話を聞いていた。

「ドラベツラの美しさといったら」

「フィオルデリージも」

黒髪の青年が言えば茶髪の青年も言い返す。

「しかも貞淑で」

「おまけに操もあつて」

「いやいや。それはどうですかな」

しかしここでその老学者が笑って言うのでした。

「フェランドさん」

「はい」

黒髪の青年が応えた。

「グリエルモさん」

「はい」

今度は茶髪の青年が応える。二人に声をかけたうえでまた語るのだった。

「私は髪は白いですし人生は熟知している」

「ふむ。それで」

「どうだというのですか？」

「もうこの議論は止めましょう」

笑って二人に言うのだった。

「これで」

「いやいや、ドン・アルフォンソ」

「それはどうでしょう」

しかし二人は少しむっとした顔で彼に言葉を返すのだった。

「それを言い出したのは貴方ですよ」

「二人が浮気すると仰ったのは」

「証明ですか」

「そうですよ。見せてもらわないと」

「僕達は納得しませんよ」

二人はなおも言うのだった。

「さもないと本当に」

「僕達も怒りますよ」

「またそんなことを」

「いえいえ、本当に彼女達が浮気するなんて」

「あまりいいとは言えませんよ」

こう言ってまた顔を顰めさせるのだった。

「ではどうされよというのですか？」

「その証明を見せて頂ければ」

「二人が浮気するということを」

彼等が問うのはこのことだった。二人も最早引くつもりはなかった。

「ですから是非共」

「それを見せて下さい」

「ではそれで宜しいのですか？」

「はい、それでどうやってですか？」

「まあ二人が浮気しないというのは確信していますよ」

「ふむ、それはいいですね」

だがこのグリエルモの言葉でアルフォンソの目に如何にも意地悪そうなのその目の光がさらに光った。それだけを見ても何かありそうである。

「私はふざけてはおりません」

「ふざけていないと」

「そうです。ただ女性はです」

グリエルモに応えて言うのだった。

「肉と骨と皮でできていて食事をしスカートをはきます」

「それは当然ですが」

「女性ですから」

グリエルモだけでなくフェランドも言う。

「しかしそれがどうしたというのですか？」

「何を今更」

「女性は操を守るもの」

アルフォンソの言葉は胸を張って何かを見るようなものになってきていた。

「果たしてそれが真実かどうか」

「ドラベッラに関してはそうですよ」

「フィオルデイリージですよ」

二人はあくまでこう主張するのだった。

第一幕その二

「絶対にそう言えます」

「神に誓つてです」

「女性の操というものはです」

しかしアルフォンソはそんな彼等に対して思わせぶりの笑顔に対して応えるのだった。

「アラビアのフェニックスのようなものです」

「フェニックス!？」

「してその心は」

「誰もがいると言いますが実際に見た者はありません」
こういうことだった。

「何処にいるのかさえも誰も知りません」

「ああ、それはドラベツラのことですよ」

「フィオルデイリージのことですね」

まだ言う二人であった。

「それはつまり」

「何だ、すぐ側にいるじゃありませんか」

「そうですよ」

「ふむ、果たしてどうですか」

それを聞いても平然としているアルフォンソだった。

「それは。今も昔も」

「今も昔も？」

「そして？」

「女性の操なぞある筈がないのですよ」

「ですからドラベツラこそが」

「フィオルデイリージこそが」

二人とアルフォンソの言葉は完全に食い違っていた。しかも双方共自信ったぶりにその主張を突き付けあうのだった。互いに一歩も

引かない。

「まあドラベツラを見ればわかりますよ」

「フィオルディリージを見れば」

「そう思われるのは結構です」

しかしここでもアルフォンソの自信は変わらないのだった。

「ですがそれを証明できますかな？」

「僕達がですか」

「そうですね。彼女達が心変わりしないと。そう確信を持てますかな？」

「勿論ですよ」

「絶対にです」

二人は楽しげに笑ってまたアルフォンソの言葉に返すのだった。

「もう付き合ってるからわかりますよ」

「育ちがいいし」

まずはこう言っていく。

「思慮深いし心は広いし」

「気心は知れているしふらつかない性格ですよ」

「ですから断言できます」

「そう、何があっても」

「涙に溜息に口付けに失神」

しかしアルフォンソは二人の言葉を聞いても相変わらずの調子であつた。

「そういうものしか感じませんが」

「ですから貴方はそもそも以前に何かあつたのですか？」

「余程酷い失恋をされたとか」

「いい加減二人もこう思つてきていた。」

「ですからそんなに」

「女性の操を、二人を信じないのですか？」

「私のことは宜しいでしょう」

アルフォンソはこの二人の言葉はあつさりとかわした。まるで闘

牛土のように。

「しかしです。その証明ですが」

「二人がフェニックスであるということの証明ですね」

「アラビアにいるという」

「そうです。その証明は」

アルフォンソはあくまで二人に対して言う。

「ではしてみせましょうか」

「ええ、是非共」

「賭けますか？」

「では百ツエッキノ」

アルフォンソは二人の問いに応えて述べた。

「それで如何でしょうか」

「千でもいいですよ」

「幾らでも」

二人は相変わらず自信たっぷりに彼に返す。

「本当に幾らでもね」

「構いませんよ」

「では千で」

アルフォンソは二人の言葉を聞いて述べた。

第一幕その三

「それで如何ですかな」

「はい、千で」

「それで御願ひします」

「そして誓つて欲しいことがあります」

アルフォンソは二人が賭けに乗ったのを見てあらためて言つてきた。

「宜しいでしょうか」

「何でしょうか」

「誓いとは？」

「貴方達の恋人には言葉や身振りでこの賭けを悟らせない」
彼が言つのはこのことだった。

「それで宜しいでしょうか」

「ええ、いいですよ」

「誓います」

二人は特に考えることなくすぐに返事をした。

「軍人の名誉にかけて」

「誓いましょう」

こうして二人は誓うのだった。アルフォンソはそれを聞いてさらに言つのだった。

「そして何でも私の言つ通りにやって下さい」

「はい、それもまた」

「誓いましょう」

やはり二人の言葉は変わらない。そしてそのうえで言つのだった。

「まあその千ツエツキーノで遊ばせてもらいますよ」

「御馳走を食べさせてもらいますよ」

「そう、そして宴の場で」

「女神のセレナーデを聴きたいな」

「ふむ、それではその宴に」

アルフォンソは穏やかにそのにこやかな二人に対して告げる。

「私も呼んでもらいたいのですが」

「はい、是非共」

「御呼びしますよ」

「そう。そしてその宴の場で何度も」

三人は何だかんだで仲良く話していく。

「乾杯しましょう」

「愛の女神に対して」

こうして三人は賭けをすることになった。三人共それぞれ自信に満ち溢れていた。そしてその頃。海が見えるのどかな庭園に二人の美女がいた。二人は緑の絨毯に紅の薔薇が咲き誇る庭に椅子を置いて座り二枚の肖像を見ていた。

二人共綺麗な白い絹のドレスを着ている。そして羽根が付いた帽子も白だ。服は両方共白づくめであるが片方は髪はブロンドで青い目をしていてふくやかな顔をしている。何処か子供めいた顔立ちであるが気品をその全体にたたえていた。まだ若いが充分な貴婦人である。

もう一人もまた小柄だが茶色の髪に緑の目をしていてこちらは顔が細い。鼻がやや高く顔は引き締まっている。知的な感じがそこにはある。

二人はそれぞれその肖像をうつとりとして見ている。そうして言い合ふのだった。

「ねえ、グリエルモはどうかしら」

「姉さん、フェランドは？」

それぞれの恋人のことを話しているようである。

「口元が綺麗で顔全体が気高くて」

「眼差しが燃えるみたいで」

「男らしさと優しさが一緒にあって」

「優しいけれど威厳があって」

二人の言葉は続く。

「ドラベツラ、そう思うでしょ？」

「フィオルデイリージ姉さんも」

二人の名前も言い合う。

「私は幸せよ。若し心が変わることがあれば」

「そうよ。生きながら愛の女神の罰を受けるわ」

「ええ、そうよ」

「きつと」

また二人で言い合うのだった。しかしここでそのブロンドの美女フィオルデイリージはふと表情を曇らせてそのうえで言ってきた。

「けれど今日は」

「どうしたの？」

「何か馬鹿げたことをしてしまいそうな」

その曇った顔で話すのだった。

「何かをしたくてむずむずするような。そんな気がするのよ」

「そんな気が？」

「若しグリエルモが来たら」

妹に対しても述べるのだった。

「私がどんな悪戯をするか見ている」

「実は私も」

ここでドラベツラも言うのだった。

「何か普段と違うわ。すぐにも結婚してしまいそうな」

「手を見せて」

フィオルデイリージは妹に対して話してきた。

第一幕その四

「手相を見てあげるわ」

「ええ、御願い」

「それじゃあ」

こうして妹の手相を見る。そのうえで彼女に告げた。

「貴女すぐに結婚するわ」

「あら、それはいいことね」

ドラベツラはそれを聞いてすぐに満面の笑顔になった。

「僥倖ね、本当に」

「ええ、本当にね」

「それにしてもよ」

ドラベツラはその満面の笑顔をすぐに曇らせてしまった。そうしてその不機嫌な顔で姉に話してきた。

「あの人達遅くないかしら。もう六時よ」

「あつ、そうね」

二人でそれぞれ時計を見て話すのだった。

「早いわね。もうそんな時間なんて」

「本当よね。あつ」

しかしここでドラベツラは声をあげた。声は晴れになっていた。

「来たわ」

「やつと来たわね」

「いえ、違ったわ」

ドラベツラの声はすぐに曇りに戻った。

「ドン!! アルフォンソさんよ」

「あの人がなの」

「ええ。何か御用かしら」

ドラベツラはその彼が自分達の方に来るのを見ながら述べた。
「私達に」

「用があるから来たのでしょうね。それじゃあ」

「ええ、そうね」

出迎える礼儀として立ち上がった。そうしてそのうえでアルフォンソを出迎える。そうしてそのうえで挨拶を交えさせてそのうえで言葉を交えさせるのだった。

「こんにちは」

「こんにちは。実はです」

アルフォンソはいきなり自分から話を切り出してきた。深刻な顔と声で。

「悲しいお知らせが」

「お知らせとは？」

「悲しい？」

「そうです。お話したくとも心が痛んで口が震えて」

彼はまずこう前置きしてきた。

「言い出せません、酷い運命です」

「酷い運命！？」

「何が一体！？」

「これ以上酷いことはありません。貴女達もあの人達もお気の毒に」

「私達が！？」

「しかもあの人達もって」

二人は彼の言葉を聞いてその顔を同時に曇らせてしまった。

「もしかしてあの人が死んだとか」

「まさか」

「いえ、死んではいません」

二人に一応はこう告げる。

「御健在です」

「そう、それでしたら」

「宜しいですわ」

「しかしです」

二人が胸を撫で下ろしたのを見計らってまた仕掛けるアルフォン

ソだった。

「死んだようなものです」

「怪我!？」

「それとも病気!？」

「どちらでもありません。それは」

そしてここでそれをやっとな話すのだった。

「出陣です」

「出陣!？」

「けれどそんなお話は」

「皇帝陛下よりの勅命です」

この皇帝とは神聖ローマ帝国皇帝のことである。当時ナポリはハプスブルク家の領土であり皇帝家は言うまでもなくそのハプスブルク家だ。時の皇帝は啓蒙君主として名高いヨーゼフ二世である。

「今すぐに」

「そんな。今は戦争も起こっていないのに」

「どうしてですか？」

「私はそこまでは知りません」

このことについては完全にはぐらかしていた。

第一幕その五

「ですが急に決まりましたので」

「そんな・・・」

「また本当に急に」

「だからです」

彼はまた二人に言ってきた。

「御二人をこちらに御呼びしました」

「グリエルモ・・・」

「フェランド・・・」

フィオルディリージもそれぞれ二人の名を呼んだ。二人も頂垂れ悲しい顔で姿を現わすのだった。

「ドラベツラ、これも勅命だ」

「僕達も軍人だ」

一応言葉ではこう言うのだった。

「いざ武勲を挙げに行つて来るよ」

「今これからね」

「ええ、待つてるわ」

「もう話は聞いているから」

姉妹も泣き崩れそうになるのをこらえて二人に告げる。

「どうか勇気を出して」

「戦場で」

「別れは辛い」

「けれど」

二人は芝居で姉妹は本気だ。しかしそれぞれその位置にはいた。

「僕達は行く」

「その間待つていてくれ」

「ええ、わかつてるわ」

「きつとね」

姉妹のその泣き崩れんばかりの声を聞いて二人は内心にんまりとした。そうしてそのうえで二人の間に立っているアルフォンソに対して囁くのがあった。

「御覧になれましたね」

「どうですか」

「いや、まだはじまったばかり」

しかしアルフォンソは澄ました顔でこう返すのだった。

「終わりまでわかりませんぞ」

「むむっ、もう決まっているというのに」

「まだそんなことを」

「幕は開いたばかりです」

しかしアルフォンソの言葉は変わらない。

「さあ、最後まで」

「いいでしょう。それでは」

「千ツエツキーノはその後で」

二人は余裕だった。その余裕で恋人達に顔を戻す。そうして五人はそれぞれ言うのだった。

「こうして運命は人の希望を断ち切る」

「この様な目に逢って何故人生を愛せましょう」

また二人は芝居で姉妹は本気で。アルフォンソはあの意地の悪そうな目のままである。

「誰が人生を愛せましょう」

「どのようにして」

「けれどそれでも」

「うん」

二人はそれぞれの恋人の言葉に頷いてみせる。

「きつと武勲を」

「そして剣を」

フォオルディリージが思い詰めた顔でグリエルモに言ってきた。
「貴方に万一のことがあれば私はその剣で」

「私はそうなつたら悲しみに死んでしまふわ」

ドラベツラは泣きそうな顔で話した。

「だから剣はいらないわ」

「そんなことを言わないでくれ」

「そうだよ、あまりにも不吉だよそれは」

フェランドもグリエルモもここでは演技ではなあくった。

「僕達は必ず生きて帰るから」

「神が君の心の平和を守ってくれるよ」

そして今度は本気で言うのだった。

「この美しい目は運命すらも変えてくれる」

「神よ、御守護を」

心から神に祈りもする。

「例え悪い星が彼女の平安を妨げたとしても」

「その澄んだ瞳で私を見つめてくれるように」

そして二人の言葉は一つになった。

「そうすれば僕は幸せに彼女の胸の中に戻るから」

「よし、いい感じだな」

アルフォンソは四人の様子を見ながら呟いた。

「特に二人共よくやってくれているな」

とりわけフェランドとグリエルモを見て言うのだった。

第一幕その六

「実にいい調子だ」

「むっ!？」

「あれは」

「ここで太鼓の音が聞こえてきた。マーチ調である。」

「太鼓の音だ、それではいいよいよ」

「出陣だ」

「船も来ておりますぞ」

アルフォンソはここで海に見える一隻の大きな船を指差してみせる。しかしそれが軍の船でないことはわかつている。何しろ本当は戦争なぞ起こる素振りもないのだから。

「さて、それではです」

「そう、行きます」

「いざ。陛下の為に」

二人は誓ってみせて。そうしてまた言うのだった。

「軍での生活はいい。毎日場所が変わる」

「今日は遠くへ明日は近くへ」

そしてこうも言っていくのだった。

「ある時は地上、ある時は海の上」

「ラッパと笛の響き、銃と砲弾の炸裂する音」

「それこそがまさに戦場ではある。」

「腕は高鳴り心は燃え勝利に向かう」

「それこそが軍隊での暮らしだ」

「さて、では時間です」

アルフォンソは一応その目にハンカチを当てはしている。

「皆さん」

「はい、わかっています」

「それでは」

「ドラベツラ」

「フィオルデイリージ」

四人は熱い視線を交えさせそのうで別れる。そしてやがて船が出港し姉妹は涙を流す。もっともそれはわかる人間が見れば軍艦ではないのだが。

そしてアルフォンソはここで。優しく姉妹に対して言うのだった。

「風は穏やかです」

「はい」

「あの人はそれに乗って」

「そう。ですから気に病まれることはありません」

彼もまた演じている。

「波は静かにそして神の御加護は私達の願いを聞いて頂いておりますよ」

「そうですね。それで」

「ですから気に病むことは」

「そうです」

（しかし私も中々演技ができるな）

姉妹に応えながら別のことを考えているのだった。

（さて、御二人も中々動いてくれた）

「お姉様、それでは」

「ええ」

嘆き悲しみ続ける姉妹も見る。そしてこうも思うのだった。

（ふむ。この姉妹もすぐだな。思ったより早く陥落するぞ）

「さて、それではもう」

「ええ、帰りましょう」

（しかしあの二人も気の毒なことだ）

ふと二人に同情したりもする。

（この世に存在しないものに千ツエツキーノもかけておまけに嘆き悲しむのだからな）

「海を耕し砂漠に種を撒き風を網で捕まえようとするみたいなもの

だ」

とにかく女性を信じてはいないのだった。

「さて、どうなるやら」

こんなことを言いながら家に帰っていく姉妹を見送る。その頃その姉妹の邸宅で黒いメイドの服に白い靴下とエプロン、それに頭飾りをつけた若い娘があれこれと働いていた。

「やれやれ、お給料はいいけれど」

ふと掃除を中断して両手を腰にやって伸ばす。見れば髪は茶色がかつた黒で長く波がかつている。目の色は黒く鼻が高い。かなり整った顔をしており唇は小さく紅で肌も白く彫が深い。とりわけ目はつきりとしていてまるで絵に描いたように美麗であつた。

背は小さいがスタイルはかなりいい。その彼女があれこれとぼやいていた。

「メイドの生活は朝から晩まで働いて汗まみれ」

彼女は言うのだった。

「骨を折ってそれで三十分もかかってチョコレートを作っても」

ふと白いテーブルの上に置いてあつたチョコレートを手にとってそのうえで飲むのだった。このチョコレートは飲むチョコレートであるのだ。

「こっちはこうしてつまみ食いが精々。ちょっと困つたものね」

そんなことを言っているとフィオルディリージとドラベツラが来た。見れば二人とも涙を流している。

「お嬢様方、朝のお食事ですけれど」

「ええ」

「そうね」

「あら？」

すぐに姉妹に元気がないのを見抜くのだった。

第一幕その七

「どうされました？ 一体」

「デスピーナ、剣はない？」

「毒は」

「そんな朝食のメニューはありませんけれど」

「デスピーナと呼ばれたメイドはおどけて二人に返す。

「あるのはゆで卵にソーセージに白パンですけれど」

「そうなの」

「どちらもないのね」

「お昼はパスタですよ」

「これは言われてもいないのに出した言葉だ。

「トマトとガーリックをふんだんに使った」

「ええ、けれど」

「今は食欲がないのよ」

「またどうして」

「今は一人にしている」

「ドラベツラが憂いに満ちた顔で言った。

「悲しい恋の終わりよ。もう窓も閉めて」

「こんなにいいお天気で？」

「光がもう辛い。吸っているこの空気だって」

「潮風の味がしてとてもいい空気なのに」

「私自身がたまらない。苦しみをからかうのは誰？」

「少なくとも私ではありませんよ」

「嘆き悲しむドラベツラに対してデスピーナはあくまで明るい。

「それは御安心よ」

「わかってるわ。だから」

「だから？」

「今は一人にして欲しいの」

こう言うのである。あくまで。

「私を苦しめるやみ難いこの恋心。この心から去らないように」
「去らない？」

「苦しみ私が死に絶えるまで。若し命永らえたら復讐の女神に」

「エリスに。また物騒な」

「運命の恋の惨めな実例を見せてあげます。私のこの溜息の凄まじい音と共に」

「またどうしてそこまで？」

デスピーナは首を傾げながらドラベツラに問う。そのうえでフィオルデイリージも見る。

「フィオルデイリージ様もどうして」

「大変なことになったのよ」

「大変なこと？」

またドラベツラの言葉に首を傾げる。

「何ですか、それで」

「あの人達がナポリを出たのよ」

「何だ、そんなことですか」

フィオルデイリージからそれを聞いて明るく笑い返すのだった。

「でしたらすぐお帰りにられますよ」

「それはわからないわ」

しかしドラベツラは彼女の言葉に悲しげに首を横に振った。

「それはもう」

「わからない筈がありませんが」

デスピーナにすればそうではない。

「そもそもどちらへ」

「戦場よ」

「あら、それは尚更結構なことですね」

ドラベツラのこの言葉を聞いてもまた笑っただけだった。

「勲章を付けて帰って来られますよ」

「死ぬかも知れないのに？」

「戦争で滅多に死にませんよ」

フィオルデイリージの思い詰めた言葉にも調子を変えない。

「そんなの。銃弾とか大砲で死ぬより風邪で死ぬ方がずっと多いじゃないですか」

「大丈夫だっていうの？」

「大体戦場で先頭に立つかどうか分からないじゃないですか」
「こうも言うデスピーナだった。」

「それで何で悲しむことがあります？安心していいですよ」
「けれどそれでもよ」

「何かあったらと思うと」

「はいはい、それは御聞きしました」

両手をぱんぱんと叩いてそんな姉妹を宥めてきた。

「ではこれからのことを考えましょう」

「これからのこと？」

「そうです。人は涙で生きるものではありません」

これはその通りだった。

第一幕その八

「恋によつて生きるものですよ。命短し乙女よ恋せよ」

「だからこそ悲しいのに」

「何を言っているの？貴女は」

「恋はそこいらにありますよ」

今度はこんなことを言うのだった。

「もう至るところに」

「嘘よ、それは」

「そうよ」

姉妹はデスピーナの言葉をすぐに否定した。

「私の心はあの人にだけ」

「私も。だから」

「死ぬと仰るのですか？」

「あの人がいなくなつたら本当に」

「死んでしまうわ」

「やれやれですね」

二人の嘆きに今度は肩を竦めてみせる。

「恋で死んだ人なんていないのですよ」

「それは私よ」

「私なのよ」

二人はまた言った。

「絶対にそうなるわ」

「この恋が消えたら」

「男の為に死ぬなんてそんなことはありません」

デスピーナはまた姉妹に告げた。

「別の男がその嘆きを埋め合わせてくれますよ」

「他の男を愛せる筈がないわ」

「そうよ。そんなことが」

「男心なんか風の中の羽根のようなもの」

デスピーナは男心に対しても同じ調子だった。

「何処をどうしているやら。ですから女もまた」

「どうしろっていうの？」

「今日はこの男、明日はあの男」

にこにこしながら語る。

「それでいいのですよ。男はそれこそ星の数程いるじゃないですか」

「あの人は一人だけよ」

「一人しかいないわ」

「もうわかりましたから。では私は言いますよ」

少し真面目な顔になって語ってきた。

「この苦しみを解消するには」

「ええ」

「何なの？」

「軽く遊ばれることです」

遊ぶことを勧めてきた。

「他の殿方と。軽く」

「馬鹿なことを言わないで」

「そうよ」

姉妹はそんなデスピーナの言葉に眉を顰めさせてきた。

「私がそんなことはできないわ」

「何があっても」

「おやおや。御二人が何をされていても？」

「あのグリエルモはそんなことをするっていうの？」

「フェランドも」

フィオルデイリージもドラベツラもそれぞれデスピーナに言い返す。

「絶対に有り得ないわ」

「天地がひっくり返ってもよ」

「男が浮気をしないと思われるのですか？」

デスピーナは二人のその主張を頭から笑い飛ばした。

「人には聞かせられないお話ですよ」

「何処がよ」

「その通りなのに」

「男は皆一つ穴の貉ですよ。そよぐ木の葉も定めない風向きも」

今度は実によく揺れ動くものを言葉に出してきた。

「男心よりはしっかりしてますよ」

「あの人は違うわ」

「それを否定するの？」

「偽りの涙に嘘の眼差し、優しい言葉に暖かい手。それは全部殿方の特技でございます」

そういったものを全部知っている言葉だった。

「自分の楽しみの為だけに女を愛してそれで軽蔑し愛を否定し」

「昔に何かあったの？」

「貴女確か十六じゃなかったかしら」

姉妹よりも年下だったりする。

「何か随分と人生経験豊富そうだけれど」

「何かナポリのおばさんみたいだけれど」

「イタリア娘は十六でこうでないと務まりませんよ」

自分のことを強引に全体に当てはめてもきた。

第一幕その九

「それこそ男に誠意を期待するなどは」

「無駄だつていうの？」

「モンゴル人がバイキングに憐みを乞う方がまだましです」

「モンゴル人にバイキングって」

「あんな連中に」

モンゴル人にバイキングといえば欧州の人間にとってはまさに悪の象徴である。イスラム教徒と全く同じ存在なのである。つまり恐怖でもあるのだ。

「そんな殿方達に期待しても無駄です。ですから」

「ですから？」

「同じ手口で仕返しするのですよ」

こう言つてまた浮気を薦めるのだった。

「そしてこちらの都合と虚栄心で満たすですよ」

「何かとても納得できないけれど」

「そんなこと。とても」

「いえいえ、おわかりになれますよ」

デスピーナは確信しているようだった。

「必ずね」

「そうかしら」

「本当に？」

姉妹はその言葉を信じない。しかしそれでもだった。デスピーナは確信するその笑みで姉妹を見ていた。そのうえで頂垂れてそれぞれの部屋に入る彼女達を見送りそのうえで掃除に戻っていた。

そしてここで。アルフォンソが姉妹の家に来た。まずは扉をノックする。この扉も白い。姉妹の家はその全てが白く飾られているのだ。

「静かだな。やっぱり沈んでいるな」

家の中の気配を察して呟く。

「まあ世の中は重苦しく考えてはいけないもの。軽くならないとな」
実はこれが彼の考えである。

「さて、御二人はいいとして」

ここでもう一人の存在を意識した。

「デスピーナには気をつけないな。ここは贈り物をして味方につけるとするか」

そんなことを考えながらもまずは家の中に入った。するとそこで掃除をするデスピーナと顔を合わせるのだった。彼女の顔を見てとりあえずは挨拶をする。

「やあ、今朝もお美しい」

「顔だけではなくて性格も」

こんな調子でアルフォンソにも返すデスピーナだった。

「今日も奇麗ですよ」

「そうですな。それです」

「何か？」

「ちよつと用があるのですが」

「御用件とは？」

「まずはこれを」

懐から一枚の金貨を出してきて彼女に差し出してきた。

「どうぞ」

「くれるのですか」

「協力して頂けるのなら」

「そう。それだけ私の力が必要なのね」

「如何にも」

楽しげに笑ってデスピーナに告げるのだった。

「何ならもう一枚も」

「そつちも貰うわ。それじゃあ」

「商談成立だな」

「ええ。同盟は締結されたわ」

笑ってこうも言うのだった。

「無事ね。それで何かしら」

「お嬢様達のことだが」

「戦場に行った程度で嘆き悲しむなんてお話にならないわ
こう言ってここでまた肩を竦めさせるのだった。

「全く。そんなことを言ったら世界は涙で満ち溢れてるわ」

「その通りだ。それでだ」

「ええ。それで？」

「貴女に協力してもらいたいことは二人をお慰めすること」

「それはもうお勧めしてるのよ」

楽しそうに笑って返すデスピーナだった。

「もうね」

「おやおや、流石にわかっているんだね」

アルフォンソはデスピーナの今の言葉を聞いて満足そうに笑った。

「いや、それなら話は早いな」

「そうでしょ。それでどうするの？」

「二日酔いには迎え酒だよね」

「ええ。まずはそれね」

デスピーナは彼にも笑って応える。

「それが一番よ」

「実は私は二人の紳士を知っていてね」

「あら、それはまた好都合なことね」

「そうじゃろ？ お金持ちで御二人に御会いたいというな」

「都合のいいことって続くのね」

「神はよきものをもたらしてくれる」

自分に都合のいいことを言うがこれは彼の信仰でもある。そして同時にデスピーナもまたそんな信仰を持っているのである。二人は似た者同士でもあるのだ。

第一幕その十

「これに成功したら二十エキュだが？」

「同盟締結の他になのね」

「そう。それでいいかな？」

「それでその殿方達はお若くてハンサムかしら」

お金のことは聞いたので次の問題はこの二つだった。

「それはどうなの？」

「そちらも合格だよ。充分ね」

「そうなの。じゃあ一度見てみたいわね」

デスピーナはここまで話を聞いてこう述べた。

「どんな方なのか」

「うむ。実はもうこちらに御呼びしていてな」

「用意がいいわね」

「私は何でも用意周到にする主義だからな」

また笑って話すのだった。

「だからこそじゃよ」

「了解よ。御呼びして下さいな」

「それでは」

ここで懷から鈴を取り出して鳴らす。すると扉のドアからあの二人が出て来た。二人共白いターバンを巻き羽根をつけている。そのうえ濃い付け髭を顔中につけてそのうえそれぞれみらびやかなアラブの服で飾っている。フェランドは赤、グリエルモは青である。

「おお、この方がイタリアの」

「何とお奇麗な」

「イスラムの方なの？」

デスピーナは二人の変装には気付かずにアルフォンソに問うた。

「ひょっとして」

「アルバニアから来られた方だな」

「じゃあこの格好でもキリスト教徒なのね」
「そういうことだよ」

アルバニアは当時オスマン＝トルコの領土だった。そこで数少ないキリスト教徒の民族だったのである。

「だからお嬢様方に声をかけても」

「問題はないわね」

「駄目かな」

「お髭が気になるけれど」

デスピーナは二人がつけている髭には目を顰めさせていた。この時代欧州の貴族達は皆髭を剃っていた。だから彼女からしてみれば異様なものだったのだ。

「それでもお顔は御二人共いいわね」

「ではいいかな？」

「まあいけるわね」

アルフォンソに対して頷いてみせる。

「いいわ、協力させてもらうわ」

「うむ、では頼むぞ」

「ええ、それにしても」

ここでデスピーナはふと思うのだった。

「この方々何処かで見たとかな」

「まずいな」

「気付かれたか？」

フェランドとグリエルモは今のデスピーナの言葉に顔を見合わせた。

「これはちょっとな」

「やっぱりデスピーナは鋭いか」

「まあ気のせいね」

しかし今はこう考えることにした。そうしてそのうえでまた演技を続ける。そしてここで姉妹が出て来たのだった。

「ねえデスピーナ」

「どなたかいらしたの？」

「はい、そうです」

デスピーナは姉妹に対して笑顔で答えた。

「その通りですよ」

「一体誰なの？それで」

「どなたが来られたの？」

「はい、この方々です」

デスピーナはにこりと笑って姉妹に応えそのうえで二人を手で指し示す。

「お嬢様方をお慕いし熱愛されていますよ」

「えっ、そんな」

「いけないわ」

姉妹はそれを聞いてすぐに顔を顰めさせた。

「私達はそれは」

「絶対に」

「まあまあ落ち着いて」

デスピーナはいつもの調子で笑って姉妹に告げた。

「落ち着くと色々なものが見えますよ」

「見えるも何も関係ないわ」

「さっきも何度も言った筈よ」

顔を顰めさせただけでなく口も尖らせる姉妹だった。

第一幕その十一

「それにこの方々トルコ人ではないの？」

「イスラム教徒とは絶対に」

「いえ、キリスト教徒ですよ」

「そうなのですが」

二人が言った。

「アルバニアから来ました」

「姿はトルコですが心はそこにあります」

「アルバニアから？」

「また随分と遠くから来られたのね」

二人は一応話は聞いた。

「けれどそれでもよ」

「私達は決して」

「どう思つかね」

「ええ、そうね」

アルフォンソとデスピーナは楽しそうに顔を見合わせて話すのだ
った。

「怒ってるけれど本当のところは」

「怪しいものだね。本当の心はね」

「おい、やっぱりな」

「そうだよな」

そして二人は嬉しそうに顔を見合わせていた。

「彼女は貞節だ」

「清らかだよ」

「私の心はあの人のもの」

「私もよ」

姉妹は必死の顔で言い切る。

「何があっても変わりはないから」

「決して」

「まあまあ」

ここで笑って言ったのはアルフォンソだった。

「そんなに騒ぐことはありませんよ」

「アルフォンソさん」

「貴方も来られたのですか？」

「最初からいます」

姉妹はそこまでは気付いていなかったたのである。

「本当に最初からここに」

「そうだったのですか」

「気付きませんでしたわ」

「ですからお静かに」

姉妹が少し落ち着いたのを見てまた声をかけるのだった。

「ご近所が驚かれますよ」

「え、ええ」

「わかりましたわ」

彼に言われてやっと完全に落ち着く姉妹だった。ドラベッラはそ

のうで彼に話すのだった。

「それでですね」

「こちらの方々ですか」

「そうです。アルバニアからの方ですが」

「それが何か？」

「何かではありません」

今度はフィオルデリージが彼に言う。

「今日だというのに」

「この方々は私の知っている人達です」

「はい、いつもお世話になっています」

「御立派な方ですね」

二人はまたアルフォンスに合わせて芝居をするのだった。

「このナポリに来てもおかげさまで」

「苦勞はしていません」

「いやいや、私はとても」

演技で謙遜しての言葉である。

「何もしていませんから」

「そうではありませんよ」

「その通りです」

また笑って話す二人だった。

「今日も朝を御馳走になっっていますし」

「有り難うございました」

「それです」

フィオルデイリージは二人を不審な目で見ながら問うた。

「何の御用件でこちらに」

「はい、どうか」

「是非共」

二人はここで同時に姉妹の前に片膝をついてきた。フェランドがフィオルデイリージの前に、グリエルモがドラベツラの前にである。

「どうかこの罪人を」

「ならず者をお救い下さい」

「いけませんわ」

フィオルデイリージが拒む言葉で返した。

第一幕その十二

「そんなことは」

「恋という全能の神に導かれてここに」

「貴女の輝く瞳を一目見て」

フェランドとグリエルモが言う。

「その眩い光に」

「恋にやつれた蝶は」

「ですからここに」

「そして憐れみを」

「それはできません」

フィオルデイリージの拒む言葉は変わらない。

「私は決して」

「私もです」

ドラベツラの言葉も同じだった。

「何があるうとも」

「この様な不名誉な言葉を口にして私達の心や耳、そして愛を汚さないで下さい」

フィオルデイリージは二人に告げる。

「どなたでも私達の心を誘惑できません。私達がそれぞれの恋人に誓った貞節は例え世や運命が変わっても死ぬまで守っていきます」

「あら、強気ね」

デスピーナは彼女の言葉を聞いてもただ目を二度三度としばたかせるだけだ。

「けれど最後まで続くのかしら」

「風にも嵐にも岩が動かないように私は操も愛も守ります」

フィオルデイリージの言葉は変わらない。

「私達の中には私達を慰め喜ばせる灯りがついていて死以外に私達の心の愛を変えることはありません」

ここまで言つて去ろうとする。しかしであつた。

「お待ち下さい」

「どうかここで」

二人はその彼女を呼び止める。立ち上がったところでアルフォンソにそつと囁く。

「ほら、こうなつてゐるじゃない」

「千ツエッキーノ楽しみにしてるよ」

「いやいや、まだまだこれからだよ」

だがアルフォンソはまだ笑っている。そのうえでまた姉妹に話すのだった。

「まあお待ち下さい」

「待つことはありません」

「そうです」

姉妹はきつとして彼にも言い返す。

「私が申し上げることはありません」

「もう何もありません」

「この方々は私の親友ですし」

まずはこのことを話すのだった。

「それに紳士ですよ」

「紳士！？嘘ではないのですか？」

「私達の苦しみに憐れみを」

フィオルデイリージが言つたところでまた言つグリエルモだった。

「お嬢様」

彼はドラベッラを見ていた。何故かフィオルデイリージより自然にだ。

「貴女の目のその美しさが私を傷つけそれは愛によってしか癒されません」

「まだそのようなことを」

「例え一瞬でも御心を開かれて優しい御言葉を」

彼は言つたのだった。

「さもないければ私は」

「私は？」

「もうこれで終わってしまいます」

そしてさらに言った。

「恥らわずにその美しい瞳で二つの愛の光を私の心に当てて幸福を下さい」

「幸福を？」

「そう、幸福をです」

一途な言葉で語る。

「是非。そして愛し合い貴女も幸せに。さあ御覧になって下さい」
言葉は次第に熱くなってきていた。

「この二人の立派な男達を。強く格好がよく整っています。それにこの髭も」

「髭？」

当然欧州では髭は生やされていないのでそれもいぶかしげである
が見るドラベツラだった。

「足も目も鼻もですが髭も」

また髭のことを言う。

「男の勝利とも恋の羽飾りとも何とでも御呼び下さい」

「いえ、私はもう」

しかしドラベツラは相変わらず拒む。だが。

「これで」

「そうよ。ドラベツラ」

何故か言葉が柔らかくなっていた。フィオルディリージもだ。

「御暇させてもらいます」

「早くお帰りになって下さい」

こう言って屋敷の奥に消えた。気付けばデスピーナも何時の間にかいなかった。男三人だけが残ってしまっていた。二人はここでふと言ったのだった。

第一幕その十三

「よし、大丈夫だ」

「僕達は勝ったぞ」

「どうか。だから最後の最後までわからないぞ」
アルフォンソの態度はここでも変わらない。

「まだまだな」

「まだそんなことを言うんですか？」

「もう僕達は勝ってるのに」

フェランドもグリエルモも得意そうに笑っている。

「僕達はもう勝利を収めていますよ」

「大勝利じゃないですか」

「笑っているけれど自分達で理由はわかっているのかい？」

アルフォンソは楽しそうに笑っていた。

「どうして笑っているのか」

「勿論ですよ」

「わかっているから笑うんですよ」

フェランドもグリエルモも余裕で笑い続けている。

「それだけです」

「お金の用意はできていますね」

「おいおい、君達はまだおしめをしているのかな？」

アルフォンソはまた笑ってみせてきた。

「これからだよ、明日の朝まで時間はあるのに」

「まあわかってますよ」

「それはね」

二人は余裕のまままた話す。

「僕達も軍人ですし」

「その誇りにかけて誓った通りに続けますよ」

「それではです」

アルフォンソはそれを聞いて二人に告げるのだった。

「ここを出て庭に行つて」

「庭に？」

「あそこで？」

「そうですね。そこでお待ち下さい」

「それじゃあそれで」

「行きますけれどね」

二人はそのまま向かうのだった。フェランドはそこで話した。

「僕達の恋人からの愛のそよ風は心に優しい慰めを与えてくれる。

愛の夢に育まれたこの心にこれ以上に望むものはありません」

「そうですね。じゃあフェランド」

「行こう」

もう勝利を確信してそのうえで庭に向かうのだった。しかし一人になったアルフォンソはにやにやとしてそれでまた呟くのだった。

「まあすぐにわかるさ。女性の操があるかどうかはね」

「あれ、御二人は？」

ここでデスピーナが戻ってきたのだった。

「どちらに行かれたの？」

「ああ、庭にね」

にこにことなって彼女にも話す。

「行かれたよ」

「そうなの。お嬢様方も同じよ」

「ふむ、それは都合がいい」

アルフォンソはそれを聞いてまた笑うのだった。

「実にね」

「そうですね。庭に庭だから」

「そしてだ」

アルフォンソはここでデスピーナに問うてきた。

「どう思つかね？」

「どう思つかとは？」

「この劇の結末だよ」

彼が問うのはこのことだった。

「この劇は。果たしてどうなると思うかね？」

「私なら笑ってるけれどね」

こう返すデスピーナだった。

「この状況でだと」

「笑えるんだね」

「だって今の彼氏がなくなっても次がいるじゃない」

実にあっけらかんとしている。

「そんなの。一人消えたら二人捕まえないとね」

「君本当に十六かね？」

アルフォンソもそれが少し信じられなくなった。目をしばたかせてさえている。

「随分と恋愛経験豊富なようだが」

「十歳で告白してされて」

子供の頃からだった。

「もう三桁はいつてるわよ」

「ううむ、三桁か」

「そうよ、これでわかったわね」

あらためて話すデスピーナだった。

「私の恋愛経験。このことなら誰にも負けないわよ」

「見事なものだ」

「下は八歳から」

「これは幾つの時の話だね？」

「十歳の時よ。その時十三歳の彼氏と二股だったのよ」
のっけからそれだったのである。

第一幕その十四

「それで上は七十歳までね。老若色々よ」

「ないのは女性だけか」

「そういうことよ。何でもござれよ」

「恋は天の摂理というが」

「自然の法則よ」

彼女にとってはまさにそれであつた。

「嬉しくて心地よくて楽しくて面白くて」

「何でもあるのだね」

「晴れ晴れして気が紛れて喜ばしいものじゃない」

満面の笑みで語るデスピーナだった。

「それが面白くなくなって楽しみの代わりに悩みや苦しみがあつたら」

「その時は？」

「それはもう恋じゃないわ」

これが彼女の恋愛観だった。

「そういうことよ」

「ではあのお嬢様方は」

「思う壺ね」

きつぱりと言い切った。

「あれじゃあね」

「ふむ。思う壺かね」

「そうだな。もう愛は見た」

「愛されたら愛するようになるものよ」

それまでわかつているデスピーナだった。

「後はもう自然に動いていくわ」

「では後は」

「私に任せて」

小柄だがわりかし以上にある胸をそらせていた。

「私は恋の鞘当では負けたことはないのよ」

「不敗かね」

「百戦百勝よ。鋼鉄の霊将と呼んでね」

「その言い方はよくないな」

「そうね。センスの欠片もないわね」

「それで言葉を替えることにした。」

「ここはあれね。恋愛博士ね」

「博士は私なんだがね」

「まあいいじゃない。ここは恋愛博士に任せてね」

「うむ。ではな」

「鼻先一つでどんな男も操れるわ」

どう考えても十六歳の言葉ではないが言うのだった。

「完全にね。それであの殿方達は大金持ちだったわよね」

「たんまりとな」

「それを聞いてさらに安心したわ。まずはお金だから」

「そうじゃな。それではな」

「うむ。任せるよ」

「明日の朝にはよ」

彼女もまた勝利を確信しているのだった。

「あの殿方達は鼻歌を歌っていて私も大勝利よ」

「では庭に」

「ええ、行きましょう」

二人もまた庭に向かう。そしてその庭では。姉妹が嘆いているのだった。

「こんなことって」

「そうよ。ないわ」

ドラベツラが姉に応えていた。二人とも両手で顔をの横を覆っている。

「私の心はあの方のものなのに」

「それなのにこんな」

「苦しみに満ちた海のようなもの」

二人で言うのだった。

「今の私の運命は意地悪な星が照らしているのね」

「あの方といた時はこんな苦しみは知らなかったのに。こんなに悩まなかったのに」

「それなのに今は」

「どうしてこんな」

「ここにおられたのですか」

「探しました」

しかしここでであつた。二人が庭に来たのだった。

「どうか憐れみを」

「お慈悲を」

「いけません」

「決して」

しかし二人の態度は変わらない。

「何があるうともです」

「私の心は絶対にです」

「そうですか。それなら」

「私達はもう」

二人は懷から何かを出してきた。見ればそれは黒い小瓶だった。

第一幕その十五

「これを飲んでもう」

「それで楽に」

「！？何を」

「何をなさるおつもりで？」

「決まっています、もうそれなら」

「せめてこれで」

その蓋を開ける。そして口につけようとしたその時であった。

「いかん、いかんぞ」

アルフォンソまで来た。必死な顔をしてはいる。

「まだ望みはある。だから」

「アルフォンソさんまで」

「どうしてなの？」

「アルフォンソさん、御言葉は有り難いのですが」

「もう僕達は」

二人は彼の制止を聞こうとはしない。

「何の希望もなくなりました」

「ですからお気遣いなく」

「ですから待たれよ」

しかしアルフォンソも止める演技を続ける。

「どうかここは」

「この砒素で」

「もうそれで」

「砒素！？」

「じゃあやっぱり」

姉妹は砒素と聞いて血相を変える。砒素といえば毒、これはもう常識である。

「死ぬつもりなの？」

「あの毒を飲んで」

「そうです、立派な毒です」

アルフォンソはその姉妹に顔を向けて言う。ここぞとばかりに。

「あれを飲めば本当に」

「どうしたらいいの？」

「もしかしたら本当に」

「最後に御覧になって下さい」

「私達の死を」

二人はまたここぞとばかりに言うてきた。

「捨てられた愛の惨めな結末を」

「せめて憐れみで」

「どうしたらいいの？」

「私達は」

姉妹はもうどうしていいかわからない。そして遂に二人は薬を飲むのだった。

「ああっ！」

「飲んで」

「もう終わりです」

「これで」

二人は飲んでから無念の顔を見せてきた。

「太陽の光も暗く見えてきた」

「身体が奮えて魂も気力も抜けていく」

「唇も舌ももつれて」

「もう言うことすら」

ここまで言うて庭に倒れる。アルフォンソはその彼等を仰向けにさせてそのうえで言うのだった。

「間も無く死んでしまします」

「は、はい」

「砒素ですから」

「ですからせめてです」

そして姉妹にさらに言うのだった。

「僅かの憐れみでも。なりませんか？」

「誰か来て」

「デスピーナ、来て」

姉妹は蒼白になって必死にデスピーナを呼ぶのだった。

「早くここに」

「庭に来て」

「どうしたんですか？」

そのデスピーナが何食わぬ顔で庭に出て来たのだった。

「そんなに騒がれて」

「どうしたもこうしたもないわよ」

「大変なことになったのよ」

「あれ、亡くなられたのですか？」

ここで倒れている二人に気付いたのだった。

「またどうして」

「薬を飲んでしまったのだよ」

アルフォンソは困った顔になってみせて彼女に語った。

第一幕その十六

「砒素を」

「砒素！？またそんなものをどうして」

「恋に破れたのを悲観してだよ」

あえて姉妹に聞こえるようにして話す。この時ちらりと彼女達を見るのも忘れない。

「それでね」

「何てことなのかしら」

デスピーナも演技で嘆いてみせる。

「じゃあもう死んだのね」

「いや、まだ生きておられる」

これは言うのだった。

「しかしこのままでは」

「そうね。まずは何とかしないといけないけれど」

「どうすればいいの？」

「私達にできることはあるかしら」

姉妹は蒼白になった顔でデスピーナに問うてきた。デスピーナは彼女達のその顔を見てすぐに仕掛けるのだった。

「それではですね」

「え、ええ」

「何をしたらいいの？それで」

「支えて下さい」

こう姉妹に告げるのだった。

「どうかここは」

「支えるの？」

「そうです」

姉妹をそつと誘い込む。

「ここは。そうですよね」

「うむ、その通り」

アルフォンソもそれに応えて頷くのだった。

「心は大事ですぞ」

「けれど」

「それでも」

「それで博士」

デスピーナは戸惑う姉妹をまずは置いてまたアルフォンソに声をかけた。

「お医者様と解毒剤を」

「そうだな。ここはな」

「はい、それでは」

こうして二人はその場を後にした。こうして姉妹をわざと置いていく。残された姉妹は二人の側に立つと余計に焦る。焦りながら言い合っただった。

「どうしたらいいの？」

「あの人を裏切ることとはできない」

姉妹は顔を見合わせて言い合う。

「それでもこの人達は死にそうだし」

「お姉様、どうしたらいいのかしら」

「私にもわからないわ」

フィオルディリージも困り果てていた。

「このままじゃ死んでしまうし」

「けれどあの人は」

「何か面白いことになってきたな」

「確かに」

死にそんな筈の二人もこっそり顔を見合わせて話をする。

「お芝居でもこんな面白いものは滅多にないよな」

「そうだよ。見せてもらおうか」

「こんな悲しいことはないわ」

「こんな事件は」

姉妹は姉妹で困り果てていた。

「何が何だか。もう」

「これじゃあ」

「苦しそうよ、とても」

「本当に死にそうだし」

姉妹は全く気付いていないのだった。二人の芝居に。

「そんな状態で放り出してもあれだし」

「人としておかしいわ」

ここでドラベツラは二人の顔を少し見る。見てみると。

「あれ、この人達って」

「どうしたの？」

「見てお髭はあるけれど」

姉にもその顔を見るように勧めるのだった。

「結構男前でないかしら」

「あら、そうね」

緊張から緩和に向かっていた。

「そつえば結構。けれど」

「何て冷たくなってるのかしら」

ドラベツラがグリエルモの顔に手をやって呟く。

第一幕その十七

「それに手も」

「脈が弱くなってるわ」

フィオルデイリージは脈を見ていた。しかし実際はそう思い込んでいるだけでそうではない。そうしたこともわからなくなる程焦っていたのである。

「早く誰か来てくれないと」

「お医者様は」

「何か静かになってきたな」

「そうだな」

二人はまた姉妹の様子を見てひそひそと話す。

「どうにもこうにも」

「風向きが変わったのかな」

「だとしたら問題かな？」

フェランドはそつと二人を見ながら述べた。

「このままいくと」

「死んだら泣いてしまっわ」

「何て可哀想なの」

姉妹の嘆きも強くなっていく。グリエルモもそれを見て言うのだ。
「つた。」

「それが問題なんだよ。同情の心が次第に愛に変わるがどうか」

「だよな。これが愛に変わると」

そんなことを危惧しているとだった。アルフォンソが戻ってきたのだった。

「やあ。お待たせしました」

「アルフォンソさん」

「お医者様は？」

「はい、こちらに」

ここで早速その医者を案内してきた。そうしてやって来たのは。白衣に眼鏡にもじやもじやの鬘で武装している。しかし見てみればそれは。

「デスピーナだよな」

「間違いない」

二人はすぐにわかったのだった。

「しかし。物凄い変装だな」

「どんなセンスしてるんだ？」

「グーテンモーゲン、フロイライン」

そして当然イタリア語とは別の言葉を出してきた。

「何、これ」

「ドイツ語!？」

「何でも話せますので」

デスピーナは声色を使って話すのだった。一応男のものに聞こえなくもない。

「ギリシア語にアラビア語にトルコ語に古代ヴァンダル語」

「何でもですのね」

「しかも聞いたことのない言葉まで」

「それにスワビア語に韃靼語。何でも話せますよ」

「うむ、素晴らしい博識の方です」

アルフォンソはデスピーナの演技に感心してみせてきた。

「それではです。患者ですか」

「この御二人ですね」

「そうです。診て頂けますか」

その仰向けにされている二人を指し示して芝居を続ける。

「どうか」

「それでどうされたのですか？」

「毒を飲みました」

デスピーナは勿体ぶってその二人を見下ろしている。真相をわかったうえでだ。

「それで今この有様です」

「左様ですか」

「それで先生」

「どうなのでしょう」

姉妹は怪訝な顔でデスピーナが化けている医者に尋ねるのだった。

「御二人はこのまま」

「まさか」

「最初に動機を知らないといけません」

やはりデスピーナは勿体ぶっている。

「その次に毒の性質です」

「毒のですか」

「それを」

「そう、つまり」

確かに本物の医者に見える程である。

「熱いか冷たいか」

「熱いかですか」

「そして冷たいか」

「多いか少ないか」

デスピーナはさらに話す。

「一度に飲んだか少しずつか。どうなのでしょう」

「まず飲んだのはです」

ここでアルフォンソがデスピーナに話した。

「砒素です」

「猛毒ですね」

「はい、残念なことに」

まずは毒の種類を話した。

第一幕その十八

「そしてここで飲み」

「では飲んで間もなくですね」

「そして原因は恋です」

このことも話すのだった。

「そして飲み方は一気でした」

「先生、やっぱりこの人達は」

「駄目ですか？」

「お静かに」

デスピーナはまた姉妹に対して告げたのだった。

「心配したもうな騒ぎたもうな」

「は、はい」

「わかりました」

「それではです」

そして持っている黒くて大きい革の鞆からあるものを出してきた。
それは。

「あれっ、それは」

「何ですか？」

「磁石です」

相変わらず勿体ぶった声である。

「メスメルメスメルの石という神聖ローマ帝国で発明され」

「神聖ローマで」

「皇帝陛下の」

ナポリを治めるハプスブルク家はその神聖ローマ帝国の皇帝なのである。

「それではかなり」

「素晴らしいものですね」

「そしてフランスで有名になりました」

「フランスですか」

「それはあまり」

姉妹はフランスと聞くと顔を曇らせた。フランスの王家はブルボン家でありこの時やつと手を結んだがそれでもハプスブルク家とはそれこそヴァロア家の頃から激しく対立してきていた。両家は欧州における最大の対立軸なのであった。それは英仏の關係に匹敵するものだった。

「まあそれは置いておきまして」

「はい」

「治療ですね」

「左様。まずはこうして」

その磁石を両手に持つてそのうえで二人の頭上で振り回すのだった。すると二人はそれを見て頭を磁石の動きに合わせて揺れ動かし

「動いてる」

「揺れてるわ」

姉妹はそれを見て言った。

「向きを変えて」

「頭で地面を打ってるわ」

「さて、次はです」

ここでデスピーナは姉妹に顔を向けて告げた。

「頭を持ち上げて」

「こうですか？」

「これで宜しいですか？」

「そうです。それでいいのです」

デスピーナはフィオルディリージがフェランドの、ドラベツラがグリエルモの頭を持ち上げたのを見て満足したような声を出してみせるのだった。

「これでよいのです」

「ではこれで御二人は」

「助かるんですね」

「そうです。これです」

デスピーナは満足した声で語ってみせた。

「御二人は助かりました」

「うむ、御見事です」

また頷いてみせるアルフォンソであった。

「流石はこのナポリで一番の名医です」

「それ程の方がここに来られて」

「それでこの方々をですか」

「そうなのです。この方も私の友人でして」

友人関係の設定をかなりいじってきた。

「天才医師とまで言われています」

「いやいや、そこまでは」

わざと勿体ぶるデスピーナだった。

「私はただ人を救いたいただけですから」

「何と素晴らしいお方」

「まさに神の御使いですね」

「ううむ」

「僕達は死んだのか？」

ここでわざとらしく起き上がる二人だった。

第一幕その十九

「ミーノスの裁きの場の前か」

「それともエリシオンなのか？」

「いや、違うようだぞ」

「そうだな」

またしてもわざとらしく言い合う。そしてフェランドはフィオルデイリージの、グリエルモはドラベッラの手をそれぞれ強く握って言うのだった。

「全ては貴女のおかげか」

「まさに女神だ」

言ってからその手を取って接吻をするのだった。二人はそれは静かに受けた。

そうしてここでデスピーナとアルフォンソがまた。姉妹に話した。

「危ないですぞ」

「確かに助かりました」

デスピーナの言葉がとりわけ真剣なふりをしている。

「ですが毒がまだ」

「けれどそれでも」

「この方々は」

「何とお優しい」

「美しい方なのか」

二人もまたあえて言う。しかしそれでも姉妹は態度自体は変えなかった。

「いえ、それでも私の心は」

「決して揺れ動くことはないわ」

「磁石の効果は素晴らしく」

デスピーナもここでまた話す。

「もう毒は消えようとしています」

「さて、面白い芝居が続くな」
「どうなっていくかな」
二人は楽しんでいた。しかしだった。
「しかし僕のフィオルディリージは」
「ドラベツラは」
二人の頑なな態度を見て喜んでくれた。
「確かだ」
「やはり僕達が勝つんだ」
このことを確信してそのうえでまた演技に戻るのだった。
「やはり貴女は女神です」
「何と美しいお心なのか」
「そう、穏やかにですよ」
デスピーナは姉妹への言葉を変えてきていた。
「今御二人はなおりうとしていきますから」
「ですな」
アルフォンソもそつと援護射撃をする。
「優しく。そのままで」
「そうしてあげて下さい」
「毒は消えていっていますので」
「余計に」
「接吻を」
「御願います」
二人も二人で調子に乗ってきた。
「さもないとまた」
「僕達の身体が」
「接吻!？」
「そんなことできません」
すぐに全力に拒否する姉妹だった。
「決して。そんなことは」
「できる筈がありません」

「御聞き下さい」

デスピーナは全てわかってまたしても姉妹に囁く。

「温かい御心で」

「ですが私は」

「そんなことは」

姉妹はあくまで拒もうとする。姉妹以外の四人はそれを見てそれほくそ笑むのだった。

「さて、そろそろかな」

「はじまつたわね」

アルフォンソとデスピーナは話が動いたと見ていた。

「これでは楽になるな」

「一旦動かしたら」

「よし、いい感じだ」

「頑なじゃないか、やっぱり」

そしてフェランドとグリエルモは何もわかっていなかった。

「このまま拒んでくれれば」

「いいんだよ」

「けれど」

「まさか」

しかしここで二人は。ふとも思っのだった。

「本当に怒っているのかな」

「拒んでいるのかな」

これまで確信していたが今はふと疑念にも思っのだった。

第一幕その二十

「まさかとは思うけれど」

「どうなのかな」

「助かったのはいいですけど」

「それは祝福いたします」

姉妹はまたきつとして語る。

「ですがそれでもです」

「私達の心は変わりません」

「おやおや、さらに狼狽してきたね」

「いい感じよ」

アルフォンソとデスピーナは今の姉妹の言葉にさらにほくそ笑む。

「このままこのまま」

「大路に入ったみたいね」

「どうか接吻を御願います」

「なりません、それは」

「何があっても」

どうしても拒む姉妹を見て二人は。またしても嘆いてみせてきた。

「一度だけです」

「さもないと」

また懷に手を入れてみせてきたのだ。

「また毒を」

「生きている必要がありません」

そしてまた言う。

「是非接吻を」

「御願います」

「そうです」

デスピーナは絶好のタイミングでまた姉妹に話した。

「ここは御二人の言葉通りにして下さい」

「そんな・・・・・・・・」

「それだけは」

「是非共です」

「そうですね」

良識派と思われるアルフォンソも話すのだった。

「そうしないと御二人は助かりませんから」

「私の貞節はどうなるの？」

「私の心は」

姉妹はそれを聞いてまた項垂れるのだった。

「それでどうなるの？」

「私達は」

「いや、いい流れだよ」

「やっぱり僕達の恋人だよ」

二人は姉妹の心の奥底を見ることができなかったのだ。

「さて、明日はいよいよ」

「千ツエツキーノでパーティーだな」

「二人はまだわかっていないみたいだな」

アルフォンソはその二人を見て呟く。

「もうかなり危ないのに」

「女心と秋の空」

デスピーナもわかっていた。

「必死なことは揺れ動いている証なのに」

「さて、揺れ動けばさらに揺さぶって」

「確実なものにできるわ」

「これだけ怒っているのに」

「いや、ひよっとしたら」

グリエルモはここでまた思うのだった。

「フェランド、まさかと思うけれど」

「何だい？」

「いやさ、今二人共怒ってるじゃないか」

「うん、確かに」

「それがだよ」

グリエルモの言葉は続く。

「それが変わるとしたら？」

「変わるって？」

「そうだよ。碇の焰が恋の焰にね」

「まさか」

フェランドはそれをすぐに否定するのだった。

「そんなわけないじゃない」

「気にし過ぎかな」

「そうだよ」

フェランドは笑って言うのだった。

「有り得ないって。それはね」

「いや、ひょっとしたら本当に」

「変わるっていうのかい？」

「人の心も変わるものだからね」

やはりそれはわかっていいるのだった。グリエルモにしろ。

「だから若しかしたら」

「ううん、まさかと思うけれど」

「僕もそうは思っているよ」

自分でもそうだと言う。

「それでもね。ひょっとしたら」

「確かに」

ここで遂にフェランドの心も動いてしまった。

「その可能性はゼロじゃないよね」

「確実じゃないかも」

グリエルモの方が揺れ動いてしまっていた。

「本当にまさかと思うけれどね」

「だよ。本当にまさかだけれど」

「あら、二人も」

「そうみたいだね」

そしてそんな二人の心の動きはデスピーナとアルフォンソからも確認された。

「揺れてきてるわね」

「さて、これでいいな」

二人はにんまりとしていた。そうしてそのまま流れを見るのだった。四人は揺れ動き二人は落ち着いている。そんなはじまりであった。

第二幕その一

第二幕 見事な大団円

朝デスピーナがチョコレートを摘み飲みしていたその部屋で。フイオルデイリージとドラベツラは困り果てた顔をしていた。その横にはデスピーナが立っている。

「ささ、チョコレートを」

「ええ」

「有り難う」

大きな窓のすぐ側の席に向かい合って座る姉妹はまずはそのチョコレートを受け取る。白いカップに注ぎ込まれたその黒いチョコレートが見える。

しかし姉妹はそれに手をつけず。ただそこに俯いて座っているだけであった。デスピーナはそれを見てそと声をかけるのであった、狙ったタイミングで。

「おや、どうされました？」

「どうって」

「それは」

「ですからですよ」

またここぞとばかりに言うデスピーナだった。

「迷えばです」

「迷ってはいわ」

「私もよ」

姉妹は少しムキになってデスピーナの今の言葉に言い返した。

「そんなのはとても」

「ないわよ」

「私はお嬢様方の忠実な友人ですよ」

「ええ、それはわかってるわ」

「私もよ」

姉妹は何だかんだでデスピーナを信頼し好きである。これはデスピーナも同じで実のところ三人はそれぞれ親しい間柄なのであったりする。

「それはわかってるわ」

「頼りにしてるわ」

「では私が言いたいことはわかりますね」

「わかってるからこそよ」

「それだけは」

やはりここでも拒む姉妹であった。

「駄目なのよ、何があっても」

「神に誓って」

「神は寛大ですよ」

デスピーナはドラベッラが神の名を出すところでも仕掛けた。

「必ず許して下さいますよ」

「ではどうしろというの？」

「それで」

「ですから」

そしてまた言うのだった。

「恋は楽しむものですよ」

「また言うのね」

「その言葉を」

「どんなチャンスも逃がさずに」

このこ考えは変わらないのだった。

「心変わりも操を守るのもその時次第ですよ」

「その時代次第って」

「やっぱりいい加減なのじゃ」

「殿方を上品に惹きつけそれで信用し過ぎないように」

デスピーナの言葉は続く。

「あれもこれも召し上がられて」

「まるでお菓子じゃない」

「あれもこれもって」

「そう、恋は甘いお菓子のようなもの」

そのタイミングでチェリーパイを出してみせてきた。

「ささ、これもどうぞ」

「あつ、有り難う」

「それじゃあ」

姉妹はその出されたパイを見ながら礼を述べる。見れば少しずつではあるが彼女達はチョコレートも飲みはじめていたのであった。

「とにかくですよ」

「ええ」

「どうすればいいの？」

「楽しむことです」

またこう言うデスピーナだった。

「恋を」

「貴女はそう言うけれど」

「私達はそれは」

「誰でもできることです」

デスピーナの方が一枚上であった。

「そう、誰にでも」

「とんでもないこと言うわね」

「そうやって私達を悪の道に誘うの？」

「女の勝利の為には御二人もやられることです」
「今度出したのは女の勝利だった。」

第二幕その二

「殿方達は出陣されています」

「だからこそ貞節でいな」と

「余計にそうでなければ」

「兵隊さんがしていることをするだけです」

また兵士のことを話すのだった。

「それだけです。つまり新兵を募集してです」

「それでは神が怒られるわ」

「天におわす神が」

「ここは地上ですよ」

またしても姉妹の言葉をあつさりと返してしまった。

「ですから私を信じて下さい」

「こういう時の貴女は危険だから」

「信じると何かいつも悪いことをしてしまっている気がするわ」

「それは気のせいです。宜しいですか？」

姉妹の言葉は受け流され続けている。

「あのアルバニア人の方々はお嬢様方を好きなのですよ」

「それはそうでしょうけれど」

「私達は」

「自分を好いてくれる人を嫌ってはなりませんよ」

そうしてまたしても己の恋愛観を語ってみせる。

「そう、何人でも」

「何人でもって」

「やっぱり貴女十六歳ではないんじゃないの？」

「れっきとした十六歳ですよ」

しかし本人はこう言う。

「その花の十六歳の言葉ですが」

「私の十六の時はこんなじゃなかったけれど」

「私も」

姉妹から見てもデスピーナはかなりとんでもないところがあった。

「貴女の過去がかなり気になるけれど」

「何があったのかしら」

「そう、その私の言葉です」

その言葉を受けたうえでまた話す。

「お金持ちで紳士で優しい。アルフォンソさんの仰るように」

「素晴らしい方だということです」

「つまりは」

「そういう方に冷たくしてはいけません。何があっても」

「何があっても」

「じゃあ少しは」

また揺れ動く。しかしこれこそがデスピーナの願う方向だった。

「優しくしてあげないといけないのね」

「少しだけなら。いいかしら」

（まんざらではないみたいね）

そしてこのことはデスピーナに読まれていた。

（じゃあ後は丁寧に仕込んでいって）

「グリエルモを裏切って」

「あら、そんなこと言っていないよ」

フィオルディリージの言う裏切りというのは否定する。

「私は一言も」

「けれど私達があの人達と仲良くなったら」

ドラベツラも言う。

「フェランド達が」

「それには安全な方法がありますよ」

それを知らないデスピーナではなかった。

「それも確実な方法が」

「確実な方法!？」

「そんなものがあるの」

（前から思っていたけれど少し世間知らず過ぎるわね）

姉妹のそうしたところについても考えた。

（まあそれだからこそ誘導し易いわね）

「その方法はです」

内心の言葉を隠してまた姉妹に話す。

「アルバニア人の方々が私達に会いに来るものと世間に思わせることです」

「そんなことできるの？」

「私はいつも数人の殿方をお付き合っていますので胸を張つての主張だった。小柄だが胸はある。」

「それで誰も不思議には思いませんよ」

「けれどあの御二人は」

「あつかましいから」

接吻を求めた時のことを思い出している言葉だった。

第二幕その三

「あの時だつて接吻を求めてきたし」

「そんな人達なのよ」

（そんなの常識でしょうに）

また心の中で呟くデスピーナだった。接吻なぞ彼女にとっては普通である。

（まあいいわ）

「あれは薬のせいですよ」

心の中の言葉は隠し続けまた話す。

「それで目が回って動転してのことですよ」

「だからなのね」

「あの時は」

「そうです」

強引にそういうことにしてしまった。

「憤み深く行儀がよく控えめで優しくて」

「よい方なのね」

「本当は」

「ですから少しでもお話をされることです」

（それで話は終わりよ）

心の中の言葉は相変わらず本音の言葉だった。

（もうそれでね）

「女は十五になれば世の中のことは一通り知らないといけませんよ」

「一通りなのね」

「そうです。悪魔の尻尾は何処にあるのか」

フィオルデイリージに対して述べる。

「善いことと悪いことの区別は何か。恋人達をくすぐる手管も知らなくては」

「いけないの？」

「そうです。作り笑いに嘔泣きができないと」
やはり彼女の得意なのはこれだった。

「言い訳も上手くできないと。一瞬のうちに百人の男に気を配り」
「百人!？」

「それはまた凄いわね」

「目配り一つで千人の男に意を伝え美男でも醜男でも全ての男に気を持たせ」

つまり彼女の付き合った男には色々いるということだ。

「慌てずに自分を隠して赤くならず嘔をつけないと」

「駄目だというの？」

「女はそうでない」と

「玉座の上の先の陛下の如く」

マリア「テレジアのことである。ハプスブルク家中興の祖として知られ十六人の子を持つ偉大な母親でもあった。神聖ローマ帝国の実際の主だったのだ。

「男性を導かなければ」

「陛下の如く」

「あのように」

「そうです。先の陛下はお見事でした」

彼女の夫フランツ・シュテファンは確かに神聖ローマ帝国皇帝だったが実際は妻が国内及び国外の政治を行っていた。美男子でもあり他の女性に気を向けることもあったが常に妻にそのことを察知されてそのうえで知らないうちに浮気を防がれ続けたのだ。

「あのようにです」

「そうね。陛下のようになら」

「私達も」

「流石に陛下の御名前を出すと効果抜群ね」

これまたかなりの論理のすり替えだったが二人を乗せることはできた。

（さて、後はかなり楽ね）

「ではお嬢様方」

ここまで話したうえでにこりと笑って姉妹に告げた。

「私はこれで。洗濯をしてきますね」

「ええ、御願いね」

「頼んだわ」

「はい、それでは」

一礼してから去るメイドを見送ってから。二人はまた顔を見合わせて話すのだった。

「どう思うの？貴女は」

「デスピーナはね」

ドラベツラはフィオルデイリージの言葉に応えて述べた。

「ああいう娘じゃない」

「十五につて。その時からあれだけわかってたのね」

「百人や千人つて」

彼女の白髪三千丈も読めなかった。

「そこまで知ってるっていうのは」

「何なのかしら」

「それでもとにかくよ」

フィオルデイリージの言葉は厳しい。

「あの娘の言葉を聞いたらよ」

「大変なことになるのね」

「あれは誘惑を」

顔を顰めさせ妹に告げる。

第二幕その四

「聞いたら駄目よ」

「けれどあの娘は悪いことじゃないって」

「人の噂になるのは悪いことよ」

「デスピーナに会いに来ているって噂でも？」

「駄目よ、それでも」

姉はあくまでお堅い。

「それでもね」

「わからなかったらいいお話でないの？」

しかし妹は言うのだった。

「それで。噂になってもあの娘に会いに来たってことで」

「けれど実際に会うのは私達よ」

「変わらないわよ」

妹の方が先に心が動いていた。

「ちよつと遊んだら今のこの塞いだ気持ちも晴れるわ」

「そうなの？」

「それに操に傷がつくわけでもないし」

「少しお話しただけならね」

「そういうこと」

しかしここから全ては崩れていく。姉妹はこのことがわかっていなかった。

「それならいいでしょ。どうかしら」

「貴女の好きなようにすればいいわ」

フィオルデイリージは今はこちら言うのに留めた。

「それでね」

「あら、姉さんは乗らないの？」

「後で大変なことになるのは嫌よ」

こう述べて顔を顰めさせる。

「罪を犯すことは」
「気をつけていれば大変なことにもならないし罪も犯さないわ」
やはりわかっていないドラベツラだった。
「けれど相互理解を進めるならよ」
「そうした場合には？」
「ええ。お姉様はどちらがいいの？」
じつと姉の目を見て問う。
「あの二人のナルシスのうちどちらが」
「ちょっとわからないわ」
フィオルデイリージは首を傾げてそのうえで妹に言葉を返した。
「貴女が先に選んで」
「実はもう決まってるの」
「ここで少し笑って述べるのだった。」
「もうね」
「それで誰なの？」
「あの背が高く茶色の髪の人よ」
「あの人なの」
「ええ、あの人」
こう述べるのだった。
「あの人がいいと思うのだけれど」
「じゃあ私は黒髪の人ね」
それぞれグリエルモとフェランドを選ぶのだった。
「そうなるわね」
「甘い囁きにはふざけたお答えで」
「溜息には溜息の真似で」
ドラベツラもフィオルデイリージはそれぞれ言う。
「愛しい人、私は死ぬなんて言って」
「私の宝と言って」
「それで気晴らしをすればいいのよ」
「そういうものなのね」

「あつ、こちらでしたか」

そしてまたここでアルフォンソが部屋の中に来た。姉妹は扉の方のチャイムには気付かなかったのだ。

「御二人共こちらにおられたんですね」

「あらつ、アルフォンソさん」

「今日はよく来られますね」

「そうです。すぐにお庭に来て下さい」

こう告げるのである。

「喜びがそこにありますよ」

「喜びがですか」

「はい、そうです」

肩で息をしていた。どうやら走ってきたようである。

「音楽に歌に。輝かしい光景です」

「！？何なのかしら」

「わからないわよね」

「ええ」

フィオルデイリージにもドラベッラにもわかりかねた。

第二幕その五

「お庭で何が？」

「それにしても今日のうちのお庭はとても騒がしいわ」

「魅力がそこにあります。ですから」

とにかく姉妹を庭に連れ出した。まるでそれぞれの背中を押すようにして。そうして出てみた庭には。小舟が船着場にあった。そしてそこからは。

「またあの人達が」

「今度は色々な人達と一緒にね」

フェランドとグリエルモが小舟から降りてきていた。そうして多くの歌手や演奏者達を従えていた。そうしてそのうえで姉妹に対して優しく歌うのだった。

「優しい風よ手を貸してくれ」

「私の望みに手を貸して」

「この溜息を、この心を女神の下に届けてくれ」

こう歌うのだった。

「風よ、この悩みの種は何度も聞いたろう」

「それをあの人達に全て繰り返して欲しい」

「優しい風よ手を貸してくれ」

後ろにいる歌手達も同じ歌を歌う。その歌がまず姉妹を出迎えたのだった。

「何、これ」

「この歌は」

「いやいや、御見事」

アルフォンソは目が点になっている二人の横でにこにことして拍手していた。

「お疲れ様」

「いえいえ、それでは」

「これを」

そして歌手や演奏者達は今度は花束の籠を持って来た。そうしてそれで庭のテーブルの上を飾るのだった。テーブルは瞬く間に美しい様々な花達で覆われてしまった。

「何ですか、これは」

「歌に花は」

「あらあら」

そしてまたデスピーナが出て来た。

「またいらしたんですね。今度は派手なことで」

「いや、いとしい人の為なら」

「この程度は」

フェランドもグリエルモもこう彼女に返す。それぞれの胸を抑えながら。

「頭の一番上から足の爪先まで震えています」

「恋をすれば手足もその恋に縛られ」

また言うのだった。

「それでつい」

「言葉が出ないので」

「私からも御願いです」

アルフォンソは呆然とする姉妹に対して述べたのだった。

「どうかここはせめてお声を」

「まあ少しなら」

「少しだけなら」

二人はそれだけなら、ということにして前に出るのだった。心が。

「困ったな」

「そうだな」

しかしここでフェランドとグリエルモはその調子を変えてきたのだった。

「いざとなったら」

「言葉が」

「それは大変です」

アルフォンソはこれまた二人の側に立って演技をした。

「言葉が出ないのですか」

「どうにもこうにも」

「何と言えば」

「そうですね。わかりました」

アルフォンソは俯いてしまった彼等の言葉を受けて頷くのだった。

「それではです」

「!？」

「私達に？」

「そうです」

姉妹に顔を向けての言葉だった。

「一歩だけ。御二人は緊張して言えませんで」

「それで私達の方から」

「そうなのです」

「はい、どうか憐れみを」

また姉妹に告げた。

第二幕その六

「どうかここは」

「それは」

「けれど」

「言葉がどうしても出ない」

「どうしよう」

「御願います」

アルフォンソは二人に味方して再び困惑している姉妹に告げた。

「御赦しを」

「一言だけでも話したいのに」

「心が強張ってしまつて言えない」

二人もここぞとばかりに言う。

「困つた、これは」

「どうしたものか」

「この御二人の為にも」

アルフォンソの姉妹への言葉が続く。

「どうか御願います」

「それでは」

そしてここで出て来たのはデスピーナだった。一応姉妹の側にはいる。

「御二人に代わつて私が返事を」

「貴女が？」

「私達の代わりに」

「そうです。それではです」

一歩本当に前に出て言うのだった。

「済んだことは済んだこと。過去は忘れましょう」

「えっ、過去を」

「忘れよと？」

「そうです、その奴隷の印の手枷は解いて私に腕をお貸し下さい」
「えっ」

「それって」

姉妹は今の彼の言葉に啞然とする。

「私達は別に」

「そんなことは」

「これでいいわ。二人はもう」

「そうか。では私達の仕事は終わった」

アルフォンソの言葉は見合いの仲人そのままだった。

「ここは退散しよう」

「そうですね。それでは」

さて、どうなるかな」

ここでは小声でデスピーナのところに来て囁いた。

「あの娘さん達がどうなっていくのか見ものだな」

「そうね。これで落ちないと悪魔より尊敬できるわ」

二人はにやにやとしてその場を後にした。これで四人だけになった。

四人だけになると。まずはフィオルディリージが言うのだった。

「いいお天気ですね」

まずは天気という言葉からだった。

「今日は」

「そうですね」

フェランドが笑顔でそれに応える。

「少し暑いですがけれどそれがまた」

「木も奇麗で」

ドラベツラは木を見て話をしていた。

「緑が豊かで」

「実もいいですが葉がまた」

グリエルモは彼女に向いていた。

「いい感じで」

「はい、とても」

「このお花のいいこと」

フィオルデイリージはフェランドに庭の端に咲くすみれを見せていた。

「あちらにもありますよ」

「そうですね。すみれもとても多い」

「少し歩きますか？」

フィオルデイリージから勧めたのだった。

「お庭を」

「はい、それでは」

フェランドも微笑んで彼女の言葉に応える。

「どんなことでも貴女の仰るままに」

「まあ、それ程までに」

「いよいよだね」

フェランドはここでそっとグリエルモに囁くのだった。

「正念場だよ」

「確かに」

グリエルモも彼の言葉に頷く。

第二幕その七

「頑張るようにな」

「わかってるよ」

「何をお話されているのですか？」

「彼にしっかりとお仕えするようにと」

「こうフィオルディリージに述べた。」

「そう伝えたのです」

「そうだったのですか」

「はい、ではお散歩を」

「フェランドから言ってきたのだった。」

「行きましょう」

「はい、それでは」

二人は横に並んで庭の木立の間に入って行った。そして残された二人も。

「では私達も」

「そうですね……うっ」

しかしここで急に胸を抑えて苦しみだすグリエルモだった。

「どうされたのですか？」

「胸が急に」

「当然これも芝居である。」

「痛みだして」

「毒のせいね」

「ドラベツラはそれを聞いてすぐに察した。」

「それでこんなに」

「残酷な恋の火山でより強い毒を飲んでしまいました」

「そしてここでこんなことを言うグリエルモだった。」

「その為に」

「ではかなり御身体が」

屈み込むグリエルモの背中に手を添えて気遣う。

「熱いんですね。少し扇いだら」

「そういえば二人は」

「何処かに行きました」

グリエルモはそれははつきりとわかっていた。だがあえてドラベッラの口から聞いたのである。

「けれど何処に」

「そうですね。ですが貴女は」

「私は？」

「酷い方です」

不意にドラベッラを責めてきたのだった。

「とても。酷い方です」

「一体何を」

「私を見て笑っているのですから」

こう言うのである。

「私はそのせいで死にます」

「死ぬ？またですか」

「そうですね。そうでなければ」

そして己の中に話に誘い込んでいく。

「同情の印を見せて下さい」

「ええ、わかりました」

ドラベッラは彼の勢いに押されて答える。

「私にできることなら」

「本当ですね？」

「神に誓って」

ここまで言ってしまった。

「絶対に」

（本気かな？）

グリエルモは今の彼女の言葉を聞いて心の中で呟いた。
（まさか）

しかしだった。それでも芝居は続けた。

「それではです」

「はい」

「これを」

そう言っつて懷から差し出してきたものは。

「これをどうぞ」

「これは？」

「ペンダントです」

見ればそれはハートのペンダントであつた。それを差し出してきたのである。

「どうかこれを」

「ですがこれは」

「心です」

また言つのだつた。

第二幕その八

「私の心です」

「貴方のですか？」

「そう、貴女への熱と悩みと苦しみに満ちた心の象徴です」

「ですがこれは」

見たところ金と銀で造られている。それを見て思うことはであつた。

「こんな高価なものは」

「受け取って頂けますか？」

「いえ」

しかしドラベッラは首を横に振るのだった。しかも強く。

「貴方は酷い人です」

「何故そう仰るのですか？」

「私のように貞淑な女を誘惑しようとは」

（果たしてどうかな）

グリエルモはそんなドラベッラを見て心の中で呟く。

（山が動いたんじゃないかな。だったら僕も軍人の名誉にかけてもつと攻めてみるか）

「愛しています」

そしてこの言葉を出したのだった。

「貴女を」

「なりません」

「私は貴女のものです」

また言うのだった。

「どうか」

「私を殺すのですか？」

ドラベッラの顔が思い詰めたものになる。

「そんなことを言つて」

「では一緒に」

グリエルモも思い詰めた顔になって言ってきた。

「愛しい貴女と。それならばいいですか？」

「それは」

「どうか。だからこそ」

ここでまたそのペンダントを彼女の前に見せて。そして囁く。

「このハートを貴女に。ですからどうか」

「いえ」

「どうか。何処までも共に」

「そこまで仰るのですね」

「そうです」

（悪いな、フエルンド）

ここでまた心の中で呟く。

（このままいつでもな。悪く思うなよ）

「それは偽りではありません」

「そこまで仰るのなら」

遂にそれを受けるのだった。ペンダントを。そして。

「これを」

「有り難うございます」

「けれど。私は」

思い詰めた顔でまた言うドラベツラだった。

「私のものは上げられないわ」

「何故ですか？」

「もう私のものではないから」

こう言うのである。

「だから」

「貴女のものではないと」

「そうです」

グリエルモに対しても告げる。彼がグリエルモと気付かないまま。
「その通りです」

「それではです」

グリエルモは半ば本気になってその彼女に問うた。

「貴女の胸で高鳴っているものは」

「若しも貴方が」

ドラベツラはここでは彼のその言葉に合わせてきた。

「私に下さったのならこの胸で高鳴っているものは」

「それは何故か」

「どうしてこれだけ胸が」

二人で言い合いはじめた。

「高鳴っているというの？」

「それは私も私のものではないから」

「では私は」

「そう、私は」

ドラベツラもグリエルモも互いを見詰め合って話をする。

「自分は自分のものではなく」

「貴方のもの」

「そう、貴女のもの。だから」

グリエルモは一歩前に出てそうして。そのペンダントをドラベツラの首にかけようとする。ところがであった。

「ここは」

「それでは」

彼はそれを受けてそつと彼女を後ろ向きにさせた。そうしてそのうえでまた優しく言ってきた。

第二幕その九

「何を？」

「これを」

その後ろからかけさせたのだった。

「こうしてはどうですか？」

「後ろからのね」

「綺麗な首だ」

うつとりとしてドラベツラに囁く。

「そして貴女のペンダントは」

「はい」

また向かい合っていた。グリエルモのペンダントはドラベツラの首にあり彼女のペンダントは彼の手の中にあるのだった。入れ替わりになっていた。

「私のものに」

「それは私が」

ドラベツラはうつとりとして彼の手からそのペンダントを受け取って。そうしてそのうえで自分の手で彼の首にかけるのだった。その首に。

「こうして」

「有り難うございます」

「それでは私は」

「そう、私は」

二人で言い合いそうして。

「このまま愛と心を交えさせて」

「新しい喜びと」

「甘い悩みと共に」

二人は腕を組み合いそのうえで何処かへと消えた。そうしてそのうえで消えるのだった。

そしてその頃フェランドは海辺の野原でフィオルディリージを追っていた。

「お話を聞いて下さい」

「いいえ」

しかし彼女はフェランドを避ける。そうして野原の中を舞い続けている。

「なりません、それは」

「何故ですか？」

「貴方は酷い方です」

拒む目でフェランドに言うのだった。

「私の心の平和を乱して」

「ですが私は」

「どうされるというのですか？」

「貴女を幸せにできます」

これまた一途に言うフェランドだった。そしてフィオルディリージは何時の間にか彼の言葉を立ち止まって聞いていた。

「必ず」

「嘘です」

「御願いです、少しだけでいいんです」

演技であるが必死であった。

「こちらを見て下さい」

「なりません」

それすらも拒むフィオルディリージだった。

「それだけは。なりません」

「それならばです」

ここでフェランドは無意識のうちに。駆け引きに入っていた。

「貴女がより優しい瞳で見て下さらないと駄目です」

「優しい瞳で」

「そうです」

こつ言つのである。

「どうか、私を見て」

「それはできません」

「ではその溜息は」

また駆け引きを仕掛けるのだった。

「何なのですか？」

「えっ!？」

「貴女は私の涙に耐えられない。優しい愛の気持ちにあがらうことはできない」

こう言うのである。

「優しい愛の気持ちにあがらうことができない」

「それは嘘です」

「あの顔、あの溜息の仲から優しい光が私の中に射し込む」
フェランドの言葉は続く。

「貴女は私の熱い望みに答えてくれた。もう貴女は優しい愛にほだされている」

「私にはそれは決して」

「しかしです。貴女は逃げて黙り」

ここで言葉を変えてきたのだった。

「私の訴えを聞き流す。それは儚い望みです」

「そんなことを望まれても」

「貴女はまた僕に死を与えるのですか？」

ここまで言って姿を消そうとする。フィオルディリージはそれを見て一人呟くのだった。

第二幕その十

「行ってしまう。いえ」

「それでは私は」

「行かないで。いえ」

「迷いながら言うのだった。」

「行ってしまった方がいいわ。私の弱さを見せなくて済むから」
呟きを続ける。

「こんな試練を私に与えて。けれどそれは私の罪に相応しい報いよ」
キリスト教の原罪意識であった。

「こんな時にどうして殿方の溜息なんか聞かなくてはならないの？」
「これで」

フェランドは一礼して去る。フィオルディリージは何とか踏み止まった。

「人の嘆きを弄ばなくてはならないの？恋は正しくこの心に罰を与えるのね」

「こう思い込む。」

「私の心は燃えてこの熱は清らかな愛でなくなってしまう」
さらに呟きを続ける。

「この恋は狂った、苦しく。悔惜に満ちた軽はずみなものなのだから」

「そして言うのだった。」

「グリエルモ、許して。この恋する過ちを。この木立と木陰に何時までも隠してしまいたい」

「一人になりさらに想いを強くさせていた。」

「私の情熱と操はこの邪な望みを断ち切って私に恥と恐怖を与える記憶を追い払ってくれるわ」

「そしてこうも言った。」

「この空虚な薄情な心は一体誰を裏切ったの？貴方の純潔にはより

よい報いがあるべきなのに」

ここまで言いそのうえで野原を後にするのだった。その時フェランドは庭で一人になっていたグリエルモと話をしていて。その服の上着の前をはだけさせていた。

「やあ、グリエルモ」

フェランドはにこやかに友人に挨拶をした。

「やったって？」

「僕達の勝利だよ」

「あれっ、そうなのか」

「ああ、フィオルデイリージは貞淑そのものだよ」

こう彼に話すのだった。

「完全にね」

「減点は？」

「一切ないよ」

胸を張って言う。

「もうね。満点だよ」

「ほう、それは」

「話を聞きたいかい？」

そして自分から言ってきた。

「よかったら話すけれど」

「是非共」

グリエルモもそれにすぐに乗った。

「聞かせてくれるかな」

「うん、それじゃあ」

グリエルモの言葉を聞いたうえで話をはじめ。その話は。

「庭で散歩しようということになって腕を貸して歩きはじめ」

「怪しくないかい？」

「それでまあ世間話をしたうえで話題が恋の話になって」

「それで？」

「わざと唇を震わせて涙を流し足元で死ぬと言ってやったのさ」

口元に笑みを浮かべての言葉だ。

「そうしたらね」

「うん、それで？」

「最初はふざけてからかってきて」

「それでまた言う。」

「話が変わってきて」

「それから？」

「こっちに同情する様子を見せてきて」

「おい、それはまずいんじゃないのかい？」

「それで砲撃を加えたんだよ」

「この辺りの言葉が実に軍人であった。」

「あの人は愛しいグリエルモには鳩の様に貞淑だったよ」

「ははは、そうに決まってるさ」

グリエルモはそれを聞いて満面の笑みになった。

「フィオルデイリージはそうなんだよ」

「僕に肘鉄を食わせて追っ払って逃げ出したんだ」

「よしよし」

「僕が証人になるけれど」

「こうまで言う。」

「彼女は完全だよ。難攻不落だ」

「いいニュースだ、最高の気分だよ」

グリエルモはここまで聞いて最高級のワインに酔いしれたような顔になっていた。

第二幕その十一

「有り難う。もう僕は満足だ」

「で、ドラベツラは？」

フェランドは自分の恋人に対して尋ねたのだった。

「どうなんだい？ 勿論大丈夫なんだろうね」

「大丈夫かって？」

「疑ってはいないけれど」

言いながらも少し引き攣った顔になっていた。

「全然ね。けれどどうなんだい？」

「疑いを持っていればね」

しかしここでグリエルモは言うのだった。

「よかったんだけれど」

「えっ！？ どういうこと？」

「どうということって言われても」

「ああ、言っただけだから」

（尾ひれを付けて言ってやろうかな）

少し意地悪な気持ちにもなるグリエルモだった。

「気にしないでくれ」

「まさかとは思っけれど」

「世の中疑ってみることも必要だよな」

「じゃあ早く言ってくれ」

いい加減我慢できなくなっていたフェランドだった。

「ゆっくりと絞め殺されるのは勘弁だ」

「ではブラド四世のように串刺しは？」

「あれも御免だよ」

あのルーマニアの専制君主である。あまりにも酷薄な統治と処刑を好んだのでこの時代においてもよく覚えられている人物なのである。

「絶対にね」

「そうか」

「からかってるんだろう？」

次はこう言うフェランドだった。

「僕を。そうだろう？」

「自信はあるのかい？」

「彼女は僕しか愛してはいないんだ」

無理矢理断言する感じだった。

「そう、絶対に」

「じゃあこれを見せるけれど」

グリエルモは自分の首にあるそのペンダントを見せるのだった。

「これは何かわかるかい？」

「それはドラベツラの」

ぎょつとした顔になって出た言葉だ。

「じゃあ本当に」

「そういうとき。これでわかったね」

「よくわかったよ」

彼は忌々しい顔でグリエルモに答えた。

「嫌になったよ」

「そうだろうな。まあ落ち着け」

「これを落ち着いていられるものか」

フェランドは歯噛みして言うのだった。

「ドラベツラは僕を裏切ったんだ。それでどうして」

「だから落ち着くん」

グリエルモはまた彼を制止した。

「怒っても何にもならないぞ」

「じゃあどうすれば」

「どうすればと言われると」

グリエルモも困った顔になってしまった。

「ちよつとな。答えがない」

「それじゃあどうしようもないのか」

「まああれだ」

しかしグリエルモはここで言いはじめた。

「女性諸君、君達はよく浮気をする。だから本当のところ恋人諸君の嘆きを聞いて僕は同情しているよ」

「同情で救えるのかい!？」

「救えないね。僕は君達女性諸君が大好きだ」

「それは僕だつてだ」

「そう、これは誰も知ってるし毎日それを見せているし友情の印で捧げている」

こう言っていく。しかしだった。

「だが」

「だが!？」

「そうやって沢山浮気されると本当にがっかりする。僕は何度も剣を抜いて君達の名誉を守ったのに」

「僕だつてそうだ」

グリエルモだけでなくフェランドも言う。

「それなのに」

「何度も何度も僕の心と弁舌で救ったのか。けれどそうやってすぐに浮気するのは厄介な悪い癖だよ」

「厄介どころじゃないよ」

フェランドの言葉も必死なものになっていた。

第二幕その十二

「本当に。こればかりは」

「君達は優しくて魅力的で神から頂いた頭から爪先までの優雅はまさに宝」

グリエルモはそれは認める。

「けれどそれなのに君達は浮気をする。全く信じられないが僕は君達女が大好きだ」

「僕もだよ」

フェランドは今度は口を尖らせてきた。

「けれどすぐ浮気をする、恋人達が文句を言うのも当然だ」

「今僕は非常に怒ってるよ」

フェランドはそれを隠そうともしない。

「理性と感情が酷く対立して混乱している。これではアルフォンソさんに笑われるかな」

「そうやって怒るのが余計に悪いぞ」

「そうだな。じゃどうするべきか」

「僕もやるべきなのか」

こう思いはじめるのだった。

「やはり」

「おお、ここにいたんだね」

そのアルフォンソがここで来たのだった。

「どうだい？流れは」

「最悪ですよ」

フェランドはその顔を思い切り顰めさせて彼に言い返した。

「貴方のおかげでね」

「いやいや、そうではないよ」

しかしアルフォンソはにこやかに笑って述べるだけだった。
「決してね」

「何でそう言えるんですか」

「フォオルデイリージさんにしろわからないよ。いや」

「いや？」

「確実に裏切るね」

にこやかに笑って断言するのだった。

「保証していいよ、この私が」

「いやいやアルフォンソさん」

ここでグリエルモが笑って彼に言ってきた。

「フィオルデイリージに限ってそれはないですよ」

「そう思っているんだね？」

「思ってますよ。ですから」

そしてここで言うのだった。

「千の半分ですから五百ツェッキノを」

「さて、それはどうか」

「どうかなどは」

「明日の朝まで時間はたっぷりあるじゃないか」

この主張を変えようとはしない。

「そうじゃないかい？」

「勝負は勝ったようなものですけれど」

「軍人の約束ではないのかい？」

さりげなく二人の急所を突いてもみせる。

「わかったら明日の朝まで待つんだ」

「明日の朝までですか」

「それまで」

「そうだ」

二人に対して告げるのだった。

「いいね」

「まあそこまで仰るのなら」

「僕達も」

「木の枝にいる小鳥を売る人間についてどう思うかね？」

「そんな人間いませんよ」

「っていつかそんなことやってたら詐欺師ですよ」

二人はそれが他ならぬ自分達であったこと、あることはわかっていない。

「まさか。そんな」

「絶対にいませんよ」

「そういうことだよ。じゃあ明日の朝までな」

「わかりました」

「とりあえずお昼ですけれど」

「うむ、では三人で食べよう」

アルフォンソが二人を誘った。

「さて、何がいいかね？」

「そうですね。スパゲティでも」

「食べますか」

「ではそれだ」

この時代のスパゲティはナポリかローマでしか食べられなかった。チーズをまぶしてそれで手で取って食べていたのである。食べる前にその手を顔の上まで掲げるのが食べ方である。

「三人で食べよう。美味しくな」

「ワインでも飲んで気を晴らして」

「楽しく明るく」

フェランドは懺然として、グリエルモは明るく、そしてアルフォンソはにこやかに。三人でスパゲティを食べに行くのであった。そのナポリ名物の。

第二幕その十三

そして姉妹は彼女達の部屋で二人向かい合っていた。そうしてそのパスタを食べながらデスピーナの話聞いていたのだった。

「それはいいことですね」

「貴女はそう思うの？」

「最初から申し上げている通りですよ」

デスピーナは二人の側に立ってにこやかに笑っている。彼女はもう昼食を食べたのが明る顔だ。姉妹はトマトや茸、それにガーリックのソースの幅の広いパスタを食べていた。

「ところでそのパスタですが」

「確かマツケローニだったわよね」

「はい」

ドラベツラの言葉ににこやかに笑って答える。

「昔のパスタです。如何ですか」

「ええ、美味しいわ」

「ソースもいいわね」

フィオルデイリージも言う。二人は白い陶器の食器の上にパスタを入れそのうえで銀のスプーンを使ってそのマツケローニを食べているのだった。

「これも昔ながらのなのね」

「ソースも」

「そうです、ちょっと再現してみました」

笑って答えるデスピーナだった。

「味見してみましたがかなり」

「そう。いつもながら流石よ」

「見事よ」

「ドラベツラ様、おめでとうございます」

「おめでとうなのね」

「それはそうですよ」

満面の笑顔でまたドラベッラに言う。

「一人前になりましたから」

「一人前なの」

「そう。恋をしてこそですからね」

「最初は誘惑されまいって思ってたけれど」

早速おのろけに入るのだった。

「けれど口はうまいし態度はいいし」

「それで？」

「あの悪魔の誘惑にかかったら石の心を持っていても駄目よ」

「わかってこられましたね」

デスピーナは彼女の言葉にさらに微笑むのだった。

「私達娘っ子は恋のチャンスは少ないんですよ」

「けれど貴女は」

「その数少ないチャンスをものにしてるんですよ」

自分ではこう言うのだった。

「苦労して」

「苦労してるの」

「してますよ、それはもう」

胸を張っての言葉であった。正直説得力には著しく欠けていた。

「それはもう」

「そんな苦労はしたくないわ」

しかしフィオルディリージはこう返す。

「絶対に」

「あら、フィオルディリージ様はまだで」

「あの二人もアルフォンソさんも天罰を受けるわよ」

マツケローニを食べながらデスピーナに抗議してきた。

「私も貴女も」

「私も？」

デスピーナは今の彼女の言葉にきよとした顔を作ってみせて

己を指差す。

「私もですか」

「そうよ、悪いことばかり吹き込んで」

口は尖らせてはいるが何故か目の光はそれ程咎めてはいない。

「おかげで私は」

「あら、それは結構なことですね」

もうここまで聞いただけでわかってしまうデスピーナだった。

「順調ですね」

「というと姉さんも」

ドラベツラもデスピーナの言葉でわかってしまった。

「あの黒髪の方に」

「抑えてるのよ」

隠すことはできなくなってしまうていた。

「それでもよ」

「それじゃあ私はあの栗色の髪の方で姉さんは黒髪の方で」

「何言ってるのよ、ドラベツラ」

「相手が見つかったじゃない、よかったじゃない」

「貴方にはフェランドさんがいるでしょ」

けれどフィオルデリージはムキになって妹に言い返す。

「何を馬鹿なことを言ってるのよ」

「馬鹿なことって」

「そうじゃない。あの人達は戦場に言ったのよ」

フィオルデリージはまだこのことを覚えていたのだ。

「それでどうしてそんなに明るいのよ」

「姉さんに七万回もキスしたい気分よ」

しかしドラベツラの言葉は変わらない。

「本当にね」

「本当にもじゃなくて二人はね」

「けれど姉さん。戦場に行ったのよ」

ドラベツラはこのことを姉に言うのだった。

第二幕その十四

「戦死しないって言えるの？」

「それは」

「そうでしょう？若しあの人達が戦死したら」

妹は言葉を続ける。

「残された私達はそうなるのよ」

「生きていたらどうするのよ」

姉はもう一つ考えられるケースを出した。もつともどちらかしかないのであるが。

「その場合は」

「その場合はもうあの人と一緒にトルコに行ってるわ」

「ムスリムの国に！？」

「キリスト教徒も大勢いるそうよ」

これは本当のことである。オスマン＝トルコは極めて寛容な国でありキリスト教徒も大勢いたのである。無論ムスリムに様々な特典が与えられてはいたが。

「だったらそれでいいじゃない」

「一日で考えがこんなに変わるなんて」

「それが女つてもものなんでしょうね」

ドラベツラはあっけらかんとして返した。

「デスピーナも言ってるけれど」

「その通りですよ」

ここでそのドラベツラとデスピーナがにこりと笑い合って言葉を交えさせた。

「こんなことで驚いてどうするのですか」

「そうよ姉さん」

二人はそのうえでフィオルディリージに対して言うのだった。

「女は多くの恋を経て奇麗になっていくのよ」

「ですから十五になれば」

「いえ、私は勝つわ」

しかしフィオルディリージはその気持ちを退けようと思うのだった。

「絶対に。何があっても」

「それは無理ですよ」

「そうよ」

デスピーナもドラベツラも彼女の今の言葉を信じようとしな

「必ず敗れますわ」

「断言できるけれど」

「いえ、私はやるわ」

フィオルディリージも引こうとしない。

「何があっても」

「降参した方がいいわよ、姉さん」

ドラベツラは悪戯っぽく笑ってまた告げた。そうしてそのうえで姉に対して言うのだった。

「恋は小さな泥棒、蛇みたいなもの。心に安らぎを与えたり奪ったり」

「悪党だつていうの？」

「まあ聞いて」

楽しく笑いながら姉にさらに言う。

「恋は私達の目を通して心に道をそけあつという間にその心を縛って自由を奪ってしまうのよ」

「それじゃあやっぱり」

「けれど恋の為がままにさせれば甘い美しい思いができます。けれど」

ここで言葉を変えてきた。

「逆らえば惨めな思いがやって来るのよ。だから」

「だから。どうするの？」

「若しも恋が胸に忍び込んだら後は任せればいいのよ」

「そんな軽薄な」

「けれど私はそうするわ」

実際にもうそうしてしまっているドラベツラだった。

「そういうふうだね」

「ではお嬢様」

「ええ。食べ終わつたし」

「はい、散歩を為されては如何でしょうか」

見れば二人はもうマツケローニを食べ終えていた。ワインもだ。

デスピーナはそれを見て早速食器をなおしはじめた。仕事もかなり早くて確だ。

「そのうえでシエスタでも」

「そうね。それかあの人とまたお話をして」

「ええ、どうぞそのように」

「じゃあ姉さんお先に」

「どうぞ」

二人は上機嫌で部屋を後にする。残つたのはフィオルディリージ一人だった。一人になった彼女は頂垂れたまま呟くのだった。

「皆で私を誘惑するのね。けれど負けないわ」

そのことをあらためて決意するのだった。

「ドラベツラとデスピーナに本心を言つたのはまずかったけれど。

それが若しあの人の耳に入ったら」

自分の迂闊さも呪うのだった。

「二度と会いたくはないわ。今度あの人を家に入れたらデスピーナを怒って。誘惑する殿方なんて最低よ」

ここまで言つてふと。デスピーナを呼ぶのだった。

第二幕その十五

「デスピーナ、ちょっと来て」

「はい、何でしょうか」

鈴が鳴るとすぐに戻って来たのだった。

「御呼びですか？」

「この鍵を持ってね」

ここで鍵を一つ彼女に差し出すのだった。

「それで洋服箆笥を開けて」

「はい、箆笥を」

「それであの人のサーベルを二つ」

まずはそれであった。

「それに帽子と軍服を二個、二着それぞれ持って来て欲しいのよ」

「どうされるのですか？」

「訳は聞かないで」

（あらあら）

デスピーナは彼女の言葉を聞いて内心笑った。

（これはまた面白くなってきたわね。このお嬢様もいよいよ）

（これしかないわ）

フィオルデイリージもフィオルデイリージで心の中で呟く。

（ドラベツラも目が覚めればいいけれど。私達は戦場へ）

（無駄に決まってるのに）

フィオルデイリージは深刻に、デスピーナは陽気に心の中でそれ

ぞれ呟き続ける。

（それ以外に私達が操を守る方法はないのだから）

（もう楽しめばいいのに）

「わかったわね」

「はい、お嬢様」

心の中で笑いながら真面目に頷くのだった。

「それではすぐに」

「あとは郵便用の馬を」

「馬もですか」

「ええ、六頭。すぐにね」

「それも頼むのだった。」

「御願いますわ」

「はい、それでは馬も六頭すぐに」

「最後にドラベツラもよ」

「妹も呼ぶのだった。」

「私が呼んでるって伝えて。いいわね」

「また随分と物々しいですね」

「そうでもない駄目だから」

「つついどうしてなのかも言ってしまうフィオルディリージだった。」

「だからよ」

「では今すぐに」

「御願いいね」

「それでは」

心の中でにこにこしながらその場を去る。フィオルディリージはその小さな軍師を見送りながらまた一人呟くのだった。

「フェランドさんの服が一番いいわね」

「こつ呟くのだった。」

「ドラベツラはグリエルモの。それが似合うわよね」

「おお、そうなんだよ」

ここで声をあげたのはアルフォンソだった。実は彼はずっと物陰から姉妹を見ていたのである。そこにデスピーナも一緒にいた。当然あの二人もだ。

「ほら、フィオルディリージは最後まで陥落しないぞ」

「じゃあ僕だけなのか」

グリエルモは喜んでいてフェランドは歯噛みして今にも地団駄を

踏みそうである。

「全く。僕は何て不幸なんだ」

「だから明日の朝まで待っているんだ」

アルフォンソはこう言ってそんな彼を宥めるのだった。

「いいね」

「よくはありませんよ」

「けれど明日の朝までだ。そうしたらわかるから」

「その言葉偽りはないですよね」

「勿論だよ」

それは確実だと保障するアルフォンソだった。

「私は芝居はするが嘘は言わないからな」

「じゃあ信じさせてもらいますよ」

「うむ。しかし今の彼女の服の選択は」

「見事に選ばれたわ」

デスピーナも当然ながらそれを見ている。そのうえでアルフォンソと共に笑うのだった。

「いい感じよ。そうなのよ」

「そうそう。彼女もわかってきたみたいだな」

「わかったって何がなんだろうな」

「さあ」

フェランドとグリエルモにとって今の二人の言葉は理解できないものだった。

第二幕その十六

「ただ服を選んだだけじゃないか」

「そうだよな」

「そう、その服を選んだことが重要なんだよ」

だがアルフォンソは二人にもこう言うのだった。

「それがな。大事なんだよ」

「やっぱりわからないな」

「そうだよな」

二人は相変わらず首を捻り合う。

「どうということなんだ？」

「意味がわからないが」

「相性だよ」

アルフォンソはまた言った。

「まあそれもおいおいわかるかも知れないよ」

「何が何だか」

「けれど明日の朝までだから」

とりあえず従うことにしたのだった。そしてその間にフィオルデ
イリージは。

「髪飾りを取ってそのうえであの帽子を被って」

もう出ようと考えていた。

「それであの人のところに」

「ではフェランド君」

「うん」

フェランドはアルフォンソの言葉に頷きそのうえでそつとフィオル
デイリージのところに向かった。その間フィオルデイリージは真
剣な面持ちで言っていた。

「私はもうすぐあの人の腕に抱かれるのだわ。あの軍服を着ていた
ら私が誰なのかわからないでしょうけれど」

こう言うのである。

「けれど私だとわかった時にあの人ほどだけ喜んでくれるかしら」
「ですが私は」

ここフェランドが彼女の前に出た。

「悲しみのあまり死んでしまいます」

「また貴方なのですか？」

「そうです」

思い詰めたふりをしてフィオルディリージに告げる。

「私です」

「帰って下さい」

すぐにきつとした声で彼に言い返した。

「もうすぐに」

「いえ、それ位なら」

しかしフェランドも引かない。

「私の胸を一思いに剣で」

「そんなこと仰らないで下さい」

こう言われると困り果てた顔になるフィオルディリージだった。

「私はもう」

「ですから私は」

ここでさらにフィオルディリージの側に來たのだった。彼女も何時の間にか立っていてそのうえで彼と対するのだった。

「この眼、この声が」

「声が」

「そうです。そして心が」

フェランドはじつと彼女の目を覗いて言うのだった。

「欲しいのです」

「私はそれは」

「御願いです」

よろめく彼女をさらに攻める。

「どうか私の想いを」

「ですからそれは」

「受け止めて頂けないのなら私は」

「そんなこと仰らないで下さい」

フィオルデイリージも遂に言ってしまった。

「そんなことは」

「では宜しいですね」

「・・・はい」

そして遂にこくり、と頷いてしまふのだった。

「もう私は貴方のものに」

「ではこちらへ」

「はい」

部屋の右手に向かう。そこから庭に向かうのだった。

「甘い愛の悩みも」

「喜びの溜息も」

二人の言葉が合わさる。

「全ての苦しみを救う慰めとなります」

「ですから二人で」

こうして二人は部屋を後にするのだった。そして今度はグリエルモが地団駄を踏むのだった。

「今のは何だ、何なんだ」

「まあ落ち着くんだ」

「これが落ち着いていられますか」

宥めるアルフォンソにも感情を露わにさせている。

第二幕その十七

「この髭も変装も取って彼女の前に出てそれでもう」

「ううむ、これはいかん」

アルフォンソも彼が激怒しているのを見てとりあえず離れた。

「暫く言わせただけ言わせておくか」

「やあ、只今」

ここでフェランドが戻ってきた。やはり彼もその上着の前をはだけさせている。

「僕の方も終わったよ」

「それは何よりだね」

にこにこ爽やかな顔をしているフェランドに対してグリエルモは今にも爆発しそうだ。二人の立場が完全に逆になってしまっていた。

「それで彼女は？」

「フィオルデリージのことかい？」

「そうだよ。何でこうなるんだ」

彼女が自分を裏切ったと激怒し続けていた。

「全く。世の中はどうなっているんだ」

「僕だって同じ気持ちだよ」

そしてそれはフェランドも同じであった。

「さつきは僕で今は君じゃないか」

「それはわかったが僕の気は収まらないんだ」

実際今にも剣を抜きそうである。

「この気持ちをどうすればいいんだ」

「いい案があるのだが？」

ここでアルフォンソが言ってきた。

「いいかね」

「えっ、それは一体」

「何ですか？」

「結婚するんだよ」

彼はここでこう言うのだった。

「結婚だ。どうかね？」

「冗談じゃありませんよ」

グリエルモがすぐに顔を顰めさせてそれに反論した。

「そんなことするのなら地獄行きの舟に乗りますよ」

「僕は火山に飛び込みます」

フェランドも顔を顰めさせて言う。

「そんなことをする位なら」

「全くです」

「では一生結婚できないのだが」

アルフォンソはあくまで拒もうとする二人にここでこう言うのだった。

「それでもいいのかね？」

「えっ、一生って!？」

「まさか」

「いや、実際のところあの姉妹はかなりいい娘達だ」

ここではじめて姉妹を褒めるアルフォンソだった。

「滅多にいないいい娘達だよ」

「まさか」

「それは」

「世の中もつともつと酷い女は幾らでもいる」

真顔になってこのことを話すのだった。

「幾らでもな」

「まあ話には聞きますけれどね」

「悪い女のことは」

「だったら彼女達にしておくのだ」

彼はまた二人に告げた。

「それに君達はあの娘達が好きなんだろう？」

「ええ、極めて残念ですが」
「その通りですよ、全く以って」
そしてフェランドもグリエルモもこれはその通りだった。
「どうしても離れられません」
「忌々しいことですけど」
「ではそれを受け入れることだ」
アルフォンソは達観したような声でその二人に告げた。
「あの姉妹だって人間さ。特別な存在じゃない」
「人間なのですか」
「天使でも女神でもなく」
「そう、人間なのだよ」
二人への言葉はさらに理知的になっていく。
「君達と同じな。全く同じなのだよ」
「僕達と同じ」
「人間なんですか」
「そう。では話を元に戻す方法を考えよう」
さながら魔術師のような言葉になってきていた。
「実は今晚もう考えていたんだよ」
「今晚ですか？」
「じゃあ明日の朝までというのは」
「そうだよ。一度に二組の結婚式を挙げたいと考えていたんだよ」
「ここではじめてわかる種であった。」
「それをしようとな」
「そうだったんですか」
「そんなことを」
「その前にだよ」
アルフォンソの言葉は続く。

第二幕その十八

「覚えてもらいたい詩がある」

「詩!？」

「ここで詩ですか」

「そう、それさえ覚えてもらえば君達は幸せになる」

二人を交互に見ながらの言葉だ。

「男は女を悪く言うが私は許す。例え一日に千回浮気をしたとしても人はそれを悪徳と呼び悪習と言うが」

「何かこれは」

「あの二人の」

「しまいに振られる男達は女のせいにせず自分のせいにすべきだ。何故なら老若美醜を問わず。さあ」

ここで二人に強く言ってきた。

「この言葉を一緒に」

「この言葉!？」

「それは一体」

「コシ＝ファン＝トゥッテ」

この言葉を出すのだった。

「女は皆そうする、だ」

「女は皆そうする」

「この言葉をです」

「いいかい。では一緒に」

「はい」

「それじゃあ」

呼吸を合わせる。そうして。

「女は皆そうする」

「女は皆そうする!」

「女は皆そうする!」

二人は叫んでいた。爆発するように。こう叫び合ったその直後に。これまた絶好のタイミングでデスピーナが彼等のところに戻ってきたのだった。

「それでどうされたのですか？」

「今から私が言うようにしてくれないか」

「何でしょうか？」

「まずはだね」

あれこれとデスピーナに話すアルフォンソだった。一日は終わりに近付こうとしていた。

夜の庭。そこに演奏の楽士達が集められそれぞれ席が置かれている。そうして鯨油の匂いがたちこめそこに灯りが灯されている。四人分のテーブルも用意されている。デスピーナはそこでこれまた実に陽気な調子で言っていた。

「さあ皆さんまずは火を点けて下さい」

「はい、それじゃあ」

「この鯨油に」

「鯨油って本当に有り難いわ」

デスピーナはその鯨油を入れたランタンを見ながら微笑んでいた。「安いしすぐに使えるし。まるでこれからの時代を見せてくれてるみたいね」

「そうですね。確かに」

「おかげで灯りを随分多く使えるようになりましたよ」

「これまた呼ばれた手伝いの者達も彼女の言葉に頷く。」

「松明とか蠟燭よりも明るいし」

「おまけに安い」

「さてさて、それでは」

彼女は自分もテーブルを飾りつけながら言う。

「あとは主役の登場だけねど」

「おやおや、早いね」

ここでアルフォンソが場に来てその準備が順調なのを見て微笑ん

だ。

「これはいいよ。何事も早いのはいいことだよ」

「お仕事は早くて確に」

デスピーナは自信に満ちた笑みを口元と目元に浮かべて述べた。

「遊びはじっくりと時間をかけて」

「そういうことだね」

「そういうことよ。それでチップは弾んでもらってね」

「そっちも期待していいと思うよ」

「むしろそうさせるのよ」

やはりお金のことも忘れないのだった。

「明るい歌に陽気な音楽も用意してね」

「さて、フィオルディリージさんとドラベッラさんも幸せだよな」

「全くだよ」

手伝いの者達は事情を知らず口々に言うのだった。

「こうして晴れて結ばれるんだからな」

「幸せ者だよな」

「全くだよ」

こんなことを話しながら準備を終えた。手伝いの者達はお金やお土産を気前よく貰ってそのうえで去り歌手や楽士達が演奏をはじめた。その中で遂に主役の四人がやって来た。

「いい音楽ね」

「ええ、そうね」

白い花嫁の衣装を着飾った姉妹がそれぞれ言い合う。

「この曲を聞いて余計に」

「幸せを感じるわ」

「私事です」

「無論私事です」

二人もここで言う。

第二幕その十九

「この宴の中で結ばれるとは」

「何と幸福なのか」

「デスピーナにはお礼をしないとね」

「そうね」

姉妹はデスピーナのことも話すのだった。

「ここまでお膳立てしてくれたんだから」

「絶対にね」

「じゃあいよいよ」

「式に」

（しかしな）

グリエルモはここでふと思うのだった。

（ここにあるワインが毒ならな。この姉妹に相応しいんだけれどな）

（しかしアルフォンソさんは）

フェランドも思う。

（何を考えてるのかな、本当に）

わかりかねているとここでそのアルフォンソが四人のところによつて来た。そうしてそのうえで彼等に対してにこやかに言うのである。

「それでは皆さん」

「はい」

「いよいよですね」

「そうです。全ては整いました」

穏やかに四人に告げるのだった。

「あとは婚姻の証書を持った公証人が来ますので」

「ではすぐに公証人の方をこちらに」

「是非共」

「わかりました。それでは」

アルフォンソはそれに応えてすぐに人を呼んだのだった。

「ベツカヴィヴィさん」

「はい」

すぐにその人が出て来た。それは黒い服にもじやもじやの茶色の髪に眼鏡をかけた小柄な男だった。縁の大きな帽子までしている。

「御呼びですか？」

「こちらです」 6

アルフォンソはこう言つて彼を案内する。しかし彼の声はよく聞けばデスピーナのものであった。

「こちらにその結婚をする相手がいます」

「そうですか。それではです」

「何処かで見たような気がするな」

「そうだな」

フェランドとグリエルモは彼、実は彼女を見て言い合つたのだった。

「誰だったかな」

「この声は」

「皆さんの幸多い未来を祈りつつ」

しかしデスピーナは芝居を続ける。

「私こと公証人ベツカヴィヴィは」

「はい」

そしてアルフォンソがそれに応えるのだった。

「毎度の公証人らしい威厳を以つてこちらに参りました」

「それは何よりです」

「法の定めるところにより」

デスピーナの芝居は続く。

「まず咳払いをし」

「どうぞ」

「こほん」

実際に咳払いもしてみせる。

「それでは読みましょう」

「誰かに似てるわよね」

「そうよね」

フィオルディリージもデスピーナもそれに気付いたのだった。

「何処かで見たような」

「しかも間近で」

「誰だったかしら」

「私が作りましたこの証書」

デスピーナは四人の詮索を遮るようにして言葉を続ける。

「これにより婚姻が整えましたるは」

「はい」

「それは」

「フィオルディリージとセンブローニオ」

フェランドの偽名である。

「その実の妹の」

「私ね」

「ドラベツラとティチオでありますな」

「はい、そうです」

今度はグリエルモが頷く。

第二幕その二十

「私です」

「この四人。まずは」

デスピーナは実は白紙の証書を見ながら続けていく。

「女性達はフェラーラ出身」

「そうです」

「その通りです」

姉妹がその問いに答える。

「男性達はアルバニア出身」

「仰る通りです」

「如何にも」

今度は二人が答える。

「私達はアルバニア出身です」

「そこから来ました」

「そうして結納として結納金並びに持参金を」

「それももう」

「わかっています」

四人はそれぞれ頷きそのうえで。まずは姉妹が前に出るのだった。

「じゃあサインを」

「させて下さい」

「いよいよだな」

「そうね」

ここでアルフォンソとデスピーナはそっと言い合うのだった。

「さて、これからが肝心だ」

「どうなるかしら」

二人が言い合ったところで、であつた。海の方から。

「軍タ衣生活は素晴らしい」

「えっ!？」

「あれは!？」

姉妹はその歌声にぎよつとした顔になるのだった。

「あの歌はまさか」

「あの人達が」

「毎日場所を変える」

「今日は遠くへ明日は近くへ」

歌が続く。

「ある時は地上に、ある時は海の上に」

「まさか。そんな」

「もう戻って来るなんて」

「何でこんなところで？」

「聞いてないぞ」

これはフェランドとグリエルモだった。

「どういうことなんだ？」

「これは」

「皆さんお静かに」

しかしここでアルフォンソが彼等に話す。

「どうかお静かに」

「アルフォンソさん」

「どうされるのですか？」

「私に任せて下さい」

こう話すのだった。

「大変なことですな」

「あの歌声はやっぱり」

「そうですね」

「軍の歌です」

アルフォンソは今度は姉妹に対して述べるのだった。

「軍が戻ってきました」

「まさか今日出て」

「それで今日戻って来るなんて」

「軍とはそういうものです」

しかしアルフォンソはここでも平然としていた。

「何時出て何時戻るかわかりません」

「それは知っていましたけれど」

「それでも」

「まあ落ち着いて下さい。御二人も戻って来ているかも知れません」

「嘘……」

「そんな……」

姉妹はそれを聞いてさらに青い顔になるのだった。

「それじゃあ私達は」

「どうなるの？」

「あつ、おられますね」

アルフォンソは何処からか望遠鏡を出してきていた。そうしてそのうえで海の方を見て言った。

「御二人は」

「僕達がか」

「向こうにいるのか」

二人はそれを聞いてまた話す。

第二幕その二十一

「ここにいるんだけれどな」

「じゃあお芝居だな」

「今港に上がられましたよ」

「じゃあすぐにここにも」

「来るのね」

「どうしましょう、それじゃあ」

「何をすればいいの？」

姉妹はそれを聞いてさらに焦る。その焦りのまま二人にも言う。

「どうかすぐに隠れて」

「ここは」

「隠れる？」

「私達が」

「そうよ」

「すぐに」

こう彼等に話すのだった。

「見つかったら大変よ」

「何もかもがお仕舞いよ」

「ですから落ち着いて下さい」

しかしここでアルフォンソがまた言う。

「ここは焦ってもどうにもなりません」

「は、はい」

「御願います」

姉妹はまさに藁にすがる思いだった。

「ここはどうか」

「是非共」

「さあ、今のうちに」

アルフォンソは焦る姉妹を横目に二人に声をかけた。

「着替えておくことだ」

「元の僕達に戻る」

「そうだね」

「そう、その通りだ」

アルフォンソは彼等にも話すのだった。

「さあ、早くあっちへ」

「うん、それじゃあ」

「行つて来るよ」

こうして二人は着替えに向かう。姉妹はその間も狼狽することしきりだった。

「考えても考えても」

「困つてしまふばかり」

姉妹の焦りは続いている。

「どうにもこうにも」

「若し嘘がばれたら」

そんなことを言っている間にだった。二人が軍服になって戻ってきた。ところが二人の軍服も帽子も外套も奇麗なもので剣の柄もピカピカとしている。だが狼狽することしきりの姉妹は全く気付いてはいない。

「やあ、只今」

「すぐに戻つて来れたよ」

二人はにこやかな笑みを作つて焦つたままの姉妹に対して告げてきた。

「君達のところにね」

「元気だったかい？」

「おお、二人共無事で何よりだ」

「戦争は回避されたよ」

「政治の方で話がついたみたいで」

こうアルフォンソに話す。そもそも戦争なぞなっていないから当然である。

「おかげでもう帰って来れたよ」

「一日だけだったけれど楽しい船旅だったよ」

「そうか。それは何よりだ」

「うん。それにしても」

「君達はどうしたんだい？」

二人はここで顔を真っ青にさせている姉妹に顔を向けるのだった。

「何か凄く焦っているようだけれど」

「どうかしたのかい？」

「嬉しさに混乱しているんだよ」

アルフォンソはこう取り繕う演技をした。

「それはな」

「それでなのか」

「それで」

「心臓が今にも止まりそう」

「どうにかなってしまいそうよ」

姉妹は実際に心臓の鼓動を止めることができなくなっていた。顔から冷や汗がしきりに流れて止まることがない程であった。そこまで狼狽していた。

「どうしたらいいの？」

「このままじゃ本当に」

「とりあえず荷物をね」

「置かせてよ」

二人はこう言って荷物を置こうとすると隣の部屋に向かう。そこでデスピーナが化けているその偽の公証人の姿を見るのであった。

第二幕その二十二

「あれっ、この人は」

「見たところ公証人かな」

「まづいわ」

「いよいよ」

姉妹は二人がデスピーナを見つけたのを見てさらに青い顔になる。
もう真つ白だった。

「あの人が見つかったらもう」

「何の言い訳もできないわ」

「いいえ、公証人ではありません」

しかしここでデスピーナが言うのだった。

「私はそうではありません」

「そうではない？」

「では一体」

二人はこれは演技ではなかった。本気で彼女の変装に気付いては
いないのだった。

「誰なのですか？」

「貴方は」

「デスピーナですよ」

「えっ、デスピーナ!？」

「嘘だろ、それは」

「今度も本気で言った言葉だ。」

「デスピーナだなんて」

「そんなことが有り得るものか」

「いえ、本当です」

しかし彼女はここで帽子を取りそれから髪と眼鏡も外してみせる。
するとそこに出て来たのは紛れもなくデスピーナ本人であった。

「この通り」

「何がどうなんだか」

「もう」

「おや？」

二人が困惑しているところでもたアルフォンソが仕掛けた。わざと書類を落としてそのうえで二人に対して言うのであった。

「これは一体」

「んっ！？」

「これは」

見れば結婚証書だった。しかもそこに姉妹がしている筈のないサインまである。二人はそれを見て今度は姉妹に対して言ってきた。

「これは何なんだい！？」

「結婚証書に見えるけれど」

「ご、御免なさい」

「許して」

姉妹はもう泣き崩れるしかなかった。

「私達は過ちを犯したわ」

「貴方達を裏切って」

「裏切り！？」

「何をしたんだ」

二人はわざと強い声で彼女達に問うた。

「一体何を」

「このサインは」

「それはその」

「私達は」

「まあまあ」

ここでまたしても助け舟を出すふりをしてアルフォンソが出て来たのだった。

「彼女達を責めないでくれ」

「アルフォンソさん」

「また貴方がですか」

「そうだ。まずは落ち着いてくれ」

こう二人に話すのだった。

「いいかね」

「はい、それじゃあ」

「お任せします」

「それにしても公証人がデスピーナだなんて」

「どういことなのかしら」

姉妹はここで首を傾げるのだった。

「何かあるような」

「秘密が？」

「さて、こちらに」

その間にアルフォンソは二人をあのアルバニア人達が隠れた場所に導くのだった。

「どうぞ」

「あそこは」

「あの人達が」

姉妹はアルフォンソが指差したその場所を見てまた顔を蒼白にさせる。

「どうしてあそこに？」

「これじゃあ私達は本当に」

もう今にも卒倒しそうだ。そうして出て来たのは。

二人だった。あのアルバニア人二人だ。そうして彼等はここで話すのだった。

「お嬢様、アルバニアより参りました」

「このペンダントを」

二人で言うのだった。ここで。

第二幕その二十三

そして今度はデスピーナに顔を向けて。笑って言うのであった。

「磁石のお医者様にも」

「心から感謝の言葉を」

「えっ、お医者様って」

これに驚いたのは姉妹だけではなかった。デスピーナもだった。

「どうということなの!？」

「もう何が何だか」

「話がわからないわ」

「世の中の全てが狂ってしまったの?」

姉妹はもう何が何だかわからなくなっていた。そうしてその中でまたアルフォンソが出て来て言うのだった。

「まあまあ」

「まあまあじゃありません」

「どうということなんですか?」

まずは姉妹が彼に問うのだった。

「これは一体」

「何が何なのか」

「まず私は皆さんを騙しました」

「そうだよ」

「本当にね」

二人は何時の間にかあの変装を解いていた。そうして完全に元の士官に戻っていた。

「おかげで地団駄を踏まされたよ」

「全く」

顔を顰めさせてアルフォンソに抗議する。

「僕は深く傷ついたよ」

「僕もだよ」

「しかし皆さんに知恵を授けることができました」

「知恵をですか？」

「そうです。知恵です」

こう四人に話すのである。

「生きる為の知恵です」

「これが知恵ですの？」

「どうということなの？」

姉妹はまだわからないのだった。

「知恵がどうか」

「何かなのか」

「人は過ちを犯します」

アルフォンソが話すのはこのことだった。

「それを見ることができたのですから」

「過ちを犯すとは」

「どうということなんですか？」

二人も彼に問うてきた。

「一体全体」

「それは」

「ですから完全な貞節なぞなく人は時として揺れ動くのです」

彼は二人だけでなく姉妹にも話していた。

「そして過ちを犯します」

「それが今ですか」

「今なのだと」

「そうです。ですがそれを知ってより賢くなれた筈です」

自分を囲む四人とデスピーナに話し続ける。

「これで。さあ後は」

「後は？」

「それぞれの婚姻を」

これを勧めるのである。

「それで全ては幸せに終わりますぞ」

「幸せにつて」

「じゃあ私達は」

「これで」

「一緒になれるのね」

フェランドにフィオルディリージ、それとグリエルモとドラベツ
ラが話していく。

「何はともあれ」

「これで」

「何か夢みたいなことだけれど」

デスピーナはその中で呟いていた。だがその目は困惑から解き放
たれ微笑んでさえいる。

「それでもいいわ。また別の人に仕掛けるから」

「さて、皆さん」

アルフォンソは四人をそれぞれのカップルにしてまた話す。

「物事の良い面を知る人は幸せです」

「幸せであると」

「そうですね」

「そうです。そして」

四人に応えながら言葉を続けていく。

「様々な事件と変動の中で常に理性で自分を導くことができる人は」

「どうなのでしょうか」

「他の人が泣くようなことでもその人には笑いの種になります」

これが彼の言いたいことだった。

「世の中を風が吹き荒れていてもその人は平然としていられます」

「それが今なのです」

「そういうことです」

つまり今日のことがそれなのだった。

「ですから今日は幸せに終わりましたよう」

「そうですね。色々ありましたけれど」

「それでも」

フェランドもフィオルディリージも。グリエルモもドラベツラも。それぞれ顔を見合わせて微笑むのだった。デスピーナも楽しそうにそんな彼等を見て。アルフォンソを中心にとりあえずこの騒がしい一日を幸せに終えるのであった。

コシゝファントウツテ 完

2009・5・23

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3429/>

コシ = ファン = トウッテ

2011年4月28日00時55分発行